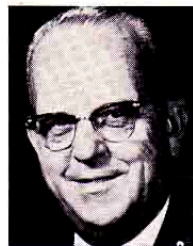




心の糧

十二使徒評議員会補助

フランクリン・D・リチャーズ



12月のこよみ

英国の作家チャールズ・ディケンズ¹はこう書いている。「我々は自らの人生において鍛えあげた鎖を身にまとう²。」これはまぎれもない真実の言葉である。人生を豊かで実り多いものにする鎖を鍛えあげることはいかに大切なことであろうか……また習慣という鎖はそれが強固でもはや打破できなくなるまでは小さすぎて人の心に触れることがないということも。

強い人生の鎖を鍛えあげようとする時、正直の習慣は最も輝ける強い環になり得る。

正直のような理想や原則に注意を集中している時、そこには大いなる力がある。しかし多くの人々の意識の中で、道徳的価値としての正直の意味はひどく曲げられてきている。

正直について考える時、最初に思い浮かべるのは他人とのことである。しかし多くの場合、自らに正直になる方がより重要である。

シェイクスピアの「ハムレット」の中で、ポロニアスは息子レアーチーズに次のように語る。「いちばん大事なことは、おのれに誠実なれ、ということだ。さすればかならず、夜が昼につぐごとくにじゃな、他人に対しても誠実ならざるを得ん。」（1幕3場）

自らに正直になるという標準を受け入れ、この目的に身をゆだねる時、人は幸福と成功に向かう階段を大いなる高みにまで登る。

自らに正直になる時、人は家族に対して不誠実になったり、雇用主に対して不正を働いたり、神や国に対して不忠実であったりするはずがないのである。

1. チャールズ・ディケンズ、英国の小説家、1812—1870。
2. 「クリスマス キャロル」より。

— も く じ —

神権者としての我々の義務……大管長	ジョセフ・フィールドディング・スミス…	341
私の兄弟の守り手……管理監督	ジョン・H・バンデンバーク…	342
神の愛……	バーナード・P・ブロックバンク…	346
あなたは姦淫してはならない……	ミルトン・R・ハンター…	349
大いなる偽り者サタン……	マリオン・G・ロムニー…	352
サンタクロースへの手紙……	ルシル・C・リーディング…	355
デビーとおはなし板……	ドロシー・ダンステッター・ワーナー…	356
清い水を飲みなさい……	ロレン・C・ダン…	359
スカウトのサンタ……	ドラ・D・フラック…	362
たとい死の陰の谷を歩むとも……	メルビン・ドグロー…	364
方向の問題……	ラエル・J・リッケル…	366
クリスマス……	リチャード・L・エバンズ…	369

- 3日 1961年 ラテンアメリカ最初のメキシコシティースターキ部組織さる。
- 5日 1849年 ブリガム・ヤング、十二使徒会により教会の大管長に選任さる。
- 9日 1849年 ソルトレーク盆地におき最初の末日聖徒の日曜学校組織さる。
- 18日 1833年 ジョセフ・スミス（初代）最初の祝福師に聖任さる。
- 23日 1805年 予言者ジョセフ・スミスバーモント州シャロンに生まる。
- 27日 1847年 ブリガム・ヤング、教会の第2代目大管長として支持さる。
- 31日 1964年 ホーム・ティーチングプログラム開始さる。

今月の表紙

19世紀のデンマークの芸術家バートルソルバルセンによる有名なキリスト像が、イタリアの彫刻家アルド・レベキにより数年前複製された。この像は現在ソルトレークのテンプル・スクエアにある訪問者センターに広大な宇宙を背景にして立っている。イエス・キリストの左右に広げた腕は、世のすべての人をみもとに來るように招いているようである。

聖徒の道

1971年12月20日発行
発行人 マービン・S・ハーディング
発行所 東京都港区南麻布5-8-10
末日聖徒イエス・キリスト教会
電話(442) 7459
印刷所 太陽印刷工業株式会社
定価 100円
予約 一年間 1,000円
外国 4ドル50セント



特に神権者を対象としたこのメッセージは、教会
の第141回年次大会で述べられたものである。

「私は、教会とその会員が世の悪
を捨て去ることを求める。」

ジョセフ・フィールディング・スミス

大 管 長

神 権 者 と し て の 我 々 の 義 務

神権者である愛する兄弟たちよ。

私は今晚、あなた方を信仰の家に共に集う同胞として、神の王国の兄弟として、聖なる神権者としてお迎えする。そして、私と共に主の聖なる権能を身に受けているが故に我々にゆだねられたいくつかの義務について、思いをはせるよう願うものである。

我々は主の代理人である。我々は主を代表する。主は我々に権能を与えられた。それは、我々自信のみならず、世にいる神の他の子供たちの救いと昇栄にも必要な、あらゆる事柄を行なう力を我々に与えるものである。

我々は主イエス・キリストの使いである。我々の使命は主の代理人となることである。我々は主の福音を説き、救いの儀式を施行し、人類に祝福を与え病人をいやし、あるいは数々の奇跡を行なうこと、つまり主が自らこの地上におられたとすれば行ないたもうことを行なうよう命ぜられているのである。そしてすべてこれは我々が神権者であるが故に課せられているのである。

個人的な思いやこの世的な誘惑にかかわらず主のみこころを行なうために、我々は主の代理人として主の律法を守る義務がある。我々自身には何の救いのメッセージも、受け入れられるべき教義も、バプテスマや聖任や永遠の結婚を執行する力もない。これらすべては主からのものであり、いかなるものも委譲された権能の結果にしかすぎないのである。

教会に加入し神権を受けたならば、我々は多くのこの世の道を捨て、聖徒にふさわしく生活するのである。我々はもはや他の人々のような服装をし、話をし、行ない、また考えることさえもしないのである。世の多くの人々は、茶、コーヒー、タバコ、酒を愛用し、麻酔薬におぼれ、また神を冒瀆し、低俗

なものにふけり、その生活は不道徳と不浄で満ちている。しかし我々はこれらとは縁がない。我々はいと高き神の聖徒、聖なる神権を保持する者である。

主はモーセの口を通して古代イスラエルの民に語りたもうた。「……もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。

あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう。」(出エジプト19：5—6)

この約束もまた我々のものである。もし我々が徳と神聖さの道を歩むならば、主ははかり知れないような祝福を与えてくださるであろう。我々は事実、ペテロが語ったように「選ばれた種族、忠実なる神権者、聖なる国民、神につける民」(欽定訳Ⅰペテロ2：9)となるのである。我々は特別な民である。なぜならこれらの標準を守らない他の人々とは異なるからである。

これまでも世に打ち勝ってきた我々は、すでに選ばれた種族であり、神につける民である。しかし神の国の事柄を第一に考えず、教会の標準に従った生活をしようとしないう人々がまだ我々の中にいることは残念なことである。

私は、教会とその会員が世の悪を捨て去ることを求める。我々は不道徳を避けなければならない。我々が欲するあらゆる形の不道徳は伝染病と同じである。我々は出産を制限することにより生命の泉をせき止めてはならない。不義で邪悪な行ないである堕胎の罪を犯してはならない。

確立された品位の秩序にそむき、律法に対して従順でない教会員は、いかなる人であろうとも良い状態にいてとして受け入れられるものではない。律法

にそむきながら主と共に歩むことはできない。なぜなら主が次のように命じたもうたからである。「この故に今ある権力に服従し、統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる……」（教義と聖約58：22）そしてこのような日に主が来臨されるのである。

主の僕としての我々の目的は、主が我々のために描きたもうた道を歩むことである。我々は主の喜ばれることをしようと望み、ただそれを語るのみならず、我々の生活そのものが主の生活と同じになるように求めなければならない。

主はあらゆる事柄に関して、我々のために自ら完全な模範を示され、次のように語られた。「あなたは、わたしに従ってきなさい。」主はニーファイ人の弟子たちにたずねたもうた。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。」そして次のように答えられた。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」（Ⅲ ニーファイ 27：27）

さて我々は、この世で最も偉大な業に従事している。我々が所有するこの神権は主御自身の力であり権能である。そして主は、この召しを全力を尽くして遂行し、光の中にあるように、光の中を歩むならば、我々は天父の王国において永遠に主と共にその栄光と誉れを受けるであろうと約束された。そのような栄光ある望みを前にして、我々はこの世の道を捨て去らないでいいのだろうか。神の王国の事柄を人生の第一のものとしないのだろうか。「神の口から出る一つ一つの言で生き」ようとしないのだろうか。召しを全力を尽くして遂行し、実際に祭司の国と義なる兄弟にかなう者となろうと思わないのだろうか。

もし戒めを守るならば、我々が受ける祝福は今考え得るあらゆる祝福より以上のものである。私は福音、地上における教会と神の王国、ならびに主が我々に与えたもうた永遠の生命への望みに感謝をささげる。

「私は、このみ業が真実であることを証する。そして我々すべてがそのかわした誓約に誠実かつ忠実であり、この人生において平安と喜びとを享受し、来たるべき世においても永遠の喜びと栄えを受け継ぐことができるよう祈るものである。私は以上のことを、主イエス・キリストのみ名により冷静かつ謙遜な気持をもって、申し上げる。アーメン。

私の

管理監督

ジョン・H・バンデンバーク

事

故で幼い子を失って悲しんでいる若い母親が、ある教会の指導者の所に来て、悲しみを柔らげるために祝福を求めた。去り際に彼女は、涙の中にこうたずねた。「この人生には、いつも苦しみが必要ではないのでしょうか。」

この質問について考える前に、地上における最初の家族のことを思い起こそう。聖書に次のように記されている。イブは、「みごもり、カインを産んで言った。『わたしは主によって、ひとりの人を得た。』」彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。」

しばらくすると、主はアベルの群れのういごは顧みられたが、カインの地の産物の供え物は、顧みられなかったので、カインは怒った。

「カインは弟アベルに言った、『さあ、野原へ行こう』。彼らが野にいた時、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。主はカインに言われた、『弟アベルはどこにいますか。』カインは答えた、『知りません。わたしは弟の番人でしょうか。』主は言われた、『あなたは何をしたので。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます。』（創世4：1—10）

この事件以来、苦痛、悲しみ、悲劇は、人類の歴史と共にあった。しかし、この聖典に出ている事件から、「私は兄弟の守り手（番人）でしょうか。」という質問が出てくる。

私たちはお互いを必要と
しているので、主は私たちを
お互いに兄弟とされた

兄弟の守り手

我々はこの問題をどう考えれば良いのだろうか。主はこのことに関して、どのような責任を私たちに与えられたのだろうか。ヨハネ第一の手紙、3章を見よう。

「わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。

わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っている。愛さない者は、死のうちにとどまっている。

主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。

子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行ないと真実とをもって愛し合おうではないか。」(Ⅰヨハネ3:11, 14, 16, 18)

母親の愛はどこから始まるのだろうか。それは犠牲ではないだろうか。母親の愛は、最も深く、最も優しい愛であると、考えられている。これは母親が、子供を生むために死の谷陰を通り、その子の福祉のために絶えず犠牲を払っているからだろうか。

キリストがこの世を愛するのと同じ理由からだろうか。キリストが苦労して作ったからだろうか。この世界とそこに住む人々のためにキリストの命を犠牲にされたからだろうか。神は世界を破滅から救うため、「そのひとり子を賜ったほどに、この世

を愛して下さった。」(ヨハネ3:16) ことと、御子が苦労して作ったものの救いのために、喜んで犠牲になったことを、我々は知らされている。

我々は皆自分が犠牲を払ったことに対して愛着を感じる。犠牲を払うほどまでに与え、仕えたとそこに愛が生じる。宗教という言葉は、私たちが兄弟のことに心を配ることを含んでいる。ヤコブ書1章27節に書かれている通りである。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞うことにほかならない。」

人が「宗教はある人には意味があるが、私は宗教的ではないし、私にとっては何の意味もない」と言う時、それは、彼らが人々のために犠牲を払って、奉仕した時に感じる心の高揚を経験したことがないためだろうか。

おそらく彼らは、隣人が何を必要としているかを認識していなかったのだろう。だけれども何か必要としていることがある。エドウィン・マーカムは、人が基本的に必要としていることを次のような言葉で、明確に、また簡潔に述べている。

「もし人が魂を生かし、人生の最善のものを知らうと思えば、その人は、3つのものを持たなければならない。

すべてのものを与える天父は、この3つのもの、言い換えれば、パン、美、兄弟愛を与えたもう。」

確かに我々の天父なる神は、我々が日毎



のパンを手に入れることができるようにして下さっている。なぜなら、神は、戒めを守ることにについて述べた箇所、次のように言っておられるからである。

「われ誠に汝らに告ぐ、汝らこれを為さば地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし。すなわち野の獣、空の鳥、木によするもの、地上を歩くものは汝らのものとなるべし。

…汝らの食物、衣服、家屋、小屋、果樹園、野菜畑、葡萄園など何れにしても、…

然り、すべてこれら季節によりて地より生ずるものは、皆人の為人の用いんために

造られ、眼を楽しませ、また等しく心を悦ばせんためなり。

然り、これらは肉体を健にし人に元氣をつくるよう、食物、衣服、味、香りのために造らる。

而して、すべてこれらのものを人に与えたるは神の悦びとするところにして、……

およそ人何事にも神を怒らせずまたは何事にも神の怒り燃ゆることなし、ただすべての事の中に神のみ手のあることを告白せず、その誠命に従わざる者にのみ神の怒りあり。」(教義と聖約59:16-21)

神がこれほどまでに我々のために良くして下さっているのです、神は我々ほど恵まれていない兄弟によくつくすように求められた。そして次のように勧めておられる。

「見よ、汝ら貧しき者のことを思い起し、彼らに与えざるべからざる扶助のために、……己が財物を神に奉獻せよ。また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。汝らこれらの財物を、わが教会の監督……の前に捧げよ。」(教義と聖約42:30-31)

この困っている兄弟に与えるようにという戒めは、断食の原則に出ている。それを教会歴史から読もう。

「これをすべての聖徒の手本としよう。そうすれば、パンに不足する人はいなくなるだろう。貧しい人が飢えているなら、貧しくない者は1日断食して、その間食べなかったものを貧しい人のために、監督に渡すようにしよう。そうすれば、全員しばらくの間、物が十分あるようになるだろう。これは、主が認可された大いなる重要な断食の原則である。聖徒たちが全員、喜びの心と明るい笑顔でこの原則を守るなら、聖徒たちはいつも豊かになるだろう。」(7巻 P.413 [英文])

ブリガム・ヤングは次のように聖徒たちに話している。

「我々が毎月第一木曜日*を断食の日として守っていることは、御承知の通りである。ここにいる人の中で、この日の起源を知っている人が何人いるだろうか。什分の一が納められる前に、貧しい人たちは献金

によって支えられていた。カートランドで人々はジョセフのもとに来て助けを求めた。それでジョセフは、断食日を設けるべきである、と言った。そしてそう決定された。断食日は、今と同じように月に一度守られた。そしてその日食べたと思われる小麦粉、肉、果物、その他何でも断食の集会場へ持ってきて、この目的のために選ばれた人の手に渡すのだった。この人は、これらの食物を受け取って、貧しい人たちに配った。もし我々が今忠実にこれを行なったら、貧しい人が小麦や、バター、チーズ、肉、砂糖、その他にこと欠くことがあるだろうか。こと欠くことはない。おそらく我々の中の貧しい人全員に必要な量よりも多くのものが集まるだろう。この方法が賢明であり、前よりも貧しい兄弟姉妹にとって役立つだろう。このことを新聞に発表しよう。各月の第一木曜日を断食日とし、すべての夫、妻、子供、僕の食べたと思われるものを監督の手に渡し、貧しい人を支援するために役立てることを、人々に知らせよう。私も他の人々と同じように喜んで自分の分を果たしたい。もし私のワード部に貧しい人がいなければ、貧しい人のいるワード部に分けたい。姉妹たちが、世話を必要とする他の姉妹たちに必要なものが十分に与えられているのを見たら、我々の心は慰められ、平和で、また霊は快活で軽く、喜びと平和に満たされるだろう。監督は教師を通して、献金し得るワード部のすべての家族が、普通であれば消費している金額を、断食日に献金するよう指導しなければならない。」(「説教集」12巻, P.115—P.116 [英文])

不幸な境遇にある兄弟たちに是非必要なパンや他の必需品を今以上に提供するため、この原則を今日教会員の前に提示するよう、私は監督たちに奨励する。

すべてのものを与える天父なる神は、パンを与えるだけではなく、美と兄弟愛をも与えようとしておられる。エドウィン・マーカムがこう語ったことを覚えているだろう。

主は人類に美を与えられただろうか。こ

のことを疑う人は、目を開けて日の出と日没を見ればよい。また雨や風の音に耳を傾け、花や虹の色に目をとめればよい。砂漠や森、麦畑、山、川、大洋などの景色の変化に注目すれば十分である。この季節には春の新しい生命に驚き始める。我々が周囲の数多くの生命の中にうちとける時、我々もその一部となってしまう。

全地は、不毛な所はなく、心を喜ばせる。我々は兄弟の守り手としての心を持てば、与えられた賜物である美を、お互いに理解するよう助け合うことができる。神が我々のために創造されたすべての物を見、感じ、味わおうではないか。マーガレット・L・ホワイトはこの責任を我々に思い出させてくれる。彼女は次のように言っている。

「私は1人の小さな子供の手を取って、み父の所に連れて行った。私の心はこのうれしい特権に感謝する気持で一杯になった。私たちはゆっくり歩いた。私は子供の小さな歩幅に合わせた。私たちは子供が気づいたことを話題にして話した。時々私たちはみ父の花を取って、その柔い花びらをなで、その美しい色を愛した。時にはそれは、み父の鳥であった。私たちは鳥が巣を作るのを見た。卵が巣にあるのを見た。また親鳥が子を大切にしているのを見て驚いたり、得意になったりした。私たちは何度もみ父の話をした。私が子供にみ父の話をすると、子供がまた私にその話をした。私と子供は何度も何度もその話をした。時々私たちはとまって休み、み父の木の一つにもたれて、み父の涼しい風に顔を冷やした。そして何も言わなかった。するとその時、私たちは薄明かりの中にみ父を見た。子供の目が輝いた。子供は愛をもって信頼し、熱心にみ父の顔を見上げた。彼はみ父の手に手をおいた。私は瞬間、われを忘れた。満足であった。」(ルーシー・ゲルツ編「短い傑作集」、ブッククラフト社、1953年, P.99 [英文])

美は、すべてのものを与える天父の賜物である。

人が必要とする3番目のもの、兄弟愛は

どうだろうか。これはおそらく3つの中でも最も大きなものである。この憎しみとしっかりと満ちた近代の世界にあって、もし平和を見つけようとすれば、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」また「自分を愛するようになあなたの隣人を愛せよ」（マタイ22：37, 39）と呼びかけることがぜひとも必要である。

人が作り出せる物質的な便利さには限度がないように思われる。新しい発見がなされて、物質の世界が開かれると、我々は知識がどれほど拡大されたかを誇る。しかし兄弟たちとどのように過ごしていったら良いかという問題の解決はこれと比較するとあまりにも遅々としたものである。

兄弟愛について記した物語が聖典に数多く出ているが、その1つに、エステル書の物語がある。これは、王の目になつて王妃になった美しいユダヤ人の女性の物語である。エステルのおじモルデカイが、すべての大臣の上に立つハマンに頭を下げることを拒んだ時、ハマンは怒って、ユダヤ人全員を滅ぼす計画を立てた。モルデカイは死の宣告を聞くと、王妃エステルに言葉を送り、「王のもとへ行つてその民のために王のあわれみを請い、王の前に願い求めるように」と伝えた。

エステルは規則を説明して、こう返事した。

「…男でも女でも、すべて召されないのに内庭にはいつて王のもとへ行く者は、必ず殺されなければならないという法律のあつてを知っています。ただし王がその者に金の笏を伸べれば生きることができるのです。しかしわたしはこの三十日の間、王のもとへ行くべき召をこうむらないのです。

モルデカイは答えた、しかしそれでは、「…あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。」

ここで、エステルは、兄弟たちに対する自分の責任を悟って、こう答えた、「あなたは行つてスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。

三日のあいだ夜も昼も食ひ飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。」（エステル4：8, 11, 14, 16）

主の手に委ねると決心した結果、エステルは、兄弟たちのために大なる働きをすることができ、兄弟たちを救うことができた。

我々の兄弟は絶えず我々と共にある。我々は兄弟たちのことに心を配るだけではなく、我々の間にいる見知らぬ人にも心を配らなければならない。我々は、パートン・ヒリスが言っている次の義務を覚えようではないか。

「もしきょうあなたの家の近所に見知らぬ人がいれば、その人に心を配ってあげなさい。彼は友だちを必要としているかも知れない。もしその人が明日も1人であるなら、隣人にそのわけを聞きなさい。」

数ヶ月前、カリフォルニアのサンフェルナンド峡谷で、兄弟愛の実践の例が見られた。地震の一番激しい揺れは朝の6時であつたが、ホーム・ティーチャーや扶助協会の指導者、そして神権定員会の会員は、ほとんどそれと同時に各自の部署につき、避難した何百人もの人々を助け始めていた。避難した家族の多くは教会員の家で待避した。

30分以内に1組のホーム・ティーチャーは、監督の家に寄り、割当てられている家族について調べる前に、特別な指示がないかどうかたずねた。他のホーム・ティーチャーは神権指導者に電話した。神権指導者は次に監督に報告し、監督はステーク部長に報告した。最初の震動があつてから、6時間以内に、いくつかのワード部は、ほとんどの会員の状態を把握していた。

ステーク部長は、一番被害の激しい所を確認し、そこに援助の手を差し伸べようとした。グラナダヒルズのある祭司定員会は、7人の子供のある家族を別の家に避難させた。ある副監督の家では、目をさますと煙突が屋根の上に倒れ、たるきをつき破

り、天井にぽっかり穴が開いているのが見えたのである。しかし彼はこう言った、「私はそれよりも、同時に燃え始めた隣の家のことの方が気がかりだった。水がなかったので、私たちは屋根にのぼって火の粉を消しにかかった。」

仕事に向かっている途中で地震にあつたある監督は、数時間家やワード部の会員と連絡できなかったので心配していた。しかし、この監督のいない間に、神権者たちは行動に移っていた。そして午後にししかかつた頃には、ワード部のすべての家族と連絡がとれていた。電話が復旧するや否や、避難しなければならぬ人がいたら、私の家に来て下さい、と申し出る電話がひっきりなしにかつてきたと監督の妻は報告している。「皆とてもすばしかったです。」彼女は言っている。「緊急事態があつた時に彼らがせつせととりかかる様子は、人の信仰を強めるものでした。」

必ずしもこれほど激烈ではないが、毎日どこかで緊急事態が生じている。主は我々がお互いに必要としていることを知っておられる。それで主は、我々をお互いに兄弟とされたのである。

我々は、天父なる神が用意されたこれらの基本的な必要を理解し、私たちが信じていると公言している所を実践し、真に兄弟の守り手となろうではないか。もし我々が再び神の前にもどらうとするなら、それは人に手を差し伸べることによってできるのである。隣人に近づく以上に神に近づくことはできないからである。以上のことをイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

* 1896年11月5日まで、断食日は教会全体を通して、毎月第1木曜日に守られていた。この日大管長会と十二使徒会の集会で、月の第一日曜日に守るようになると決定した。そして1896年12月6日が日曜日に行なわれた最初の断食日であつた。（アンドル・ジェンソン、「末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史百科事典」1941年）

真の神の愛は、私たちを悪と誘惑から救い出すに違いない。

神の愛

十二使徒評議会補助

バーナード・P・ブロックバンク長老



愛する兄弟姉妹、イエス・キリストは末日聖徒イエス・キリスト教会の頭であって、私たちにキリストの戒めを教えるように要求された。そしてキリストは、世の終りまでも私たちと共にいると約束された。この教えるようにという言葉は、戒めである。

この地上に住んでおられた時、救い主は、神を愛し、戒めを守るように教えられた。イエスは言われた。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして主なるあなたの神を愛せよ。」(マタイ22:37)これが第一の大切な戒めである。この戒めを知ることは実践することよりもはるかに簡単である。

主はなぜその子らに、心をつくし、精神をつくし、思いをつくして御自分を愛するように命じられたのだろうか。神を完全に愛するように、という言葉の裏には大いなる知恵があり、そうする時に人は神から守られる。

神は、天と地と、地上のすべての植物と動物を創造された。神は深遠で広大な宇宙を創造し、祝福を添えられた。すべての奇跡の中で最も大きな奇跡は神が人を御自分の姿、形に似せて創造されたことである。見ることのできる目や、聞くことのできる耳、思考できる心が母の胎内で創造される。母親は、どのようにして、見ることのできる目や、聞くことのできる耳、それに思考できる心を作るのかを知らない。神は、自分の姿、形に似せて人を創造したと言われた。私たちの創造と、この体の誕生そのものが、神の力を証明している。この人生と永遠の生命にとって良いものはすべて神から来る。我々は、心から神を敬い、神に献身し、また忠誠を尽く

し、神を愛する義務を負っている。

その反対は、サタンを愛することであり、神の創造の他の部分を愛することである。サタンは、人にとって良いものの創造には一切関与していない。我々は全くサタンには何の恩恵も受けていない。それにもかかわらず一部の人は、悪い感情や口論、不正、姦淫、あるいは貪欲、麻薬によって、さらに神とイエス・キリストを無視したり、安息日を無視したり、什分の一を払わなかったり、また憎しみを持ったりして、サタンに加担している。

サタンは人の敵であって、人の自由を破壊し、主に対する従順さを失わせようとしている。また人が神に似た性質を伸ばし、敬虔になろうとするのを妨げている。サタンは悪事、罪、邪悪なことを行き渡らせようとしているから、我々は思いにおいても行動においてもサタンを愛したり、サタンに仕えたりしてはならない。

イエス・キリストはこう言われた、「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ6:24)私も、人は神とサタンに兼ね仕えることはできない、と申し上げたい。ある人は兼ね仕えようとしているが、できた者はだれもない。

神を愛することにより、神の子らを愛し、尊敬することができるようになる。また人と神の關係に親しみを覚え、神と交通したいと望むようになる。多くの誠実な人々が、様々な型の至高者または至高の



力に祈っている。異教徒、仏教徒、ヒンズー教徒、回教徒、太陽や自然を崇拝する人、その他多くの人々が、それぞれの様式によって祈っている。人が作った祈りの様式が数多くあったので、イエス・キリストは、正しい祈りの方法について戒めを与えられた。その戒めは、次の通りである。多くの人はこれが戒めであることを知らない。

「だから、あなたがたはこう祈りなさい、

天にいますわれらの父よ、

御名があがめられますように。

御国がきますように。

みこころが天に行われるとおりの

地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの食物を、

きょうもお与えください。

わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、

わたしたちの負債をもゆるしてください。

わたしたちを試みに会わせないで、

悪しき者からお救いください。国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。」(欽定訳マタイ 6 : 9-13)

この祈りは、心からの、献身的な、キリストに似た者の祈りの精粹を含んでいる。我々が天父なる神を愛するなら、父なる神に祈り、語りかけるべきである。我々は神のみこころを行なおうと望み、天上におけると同様、地上においても神の王国のプログラムを持ちたいと希望するはずである。上の祈りは、我々が王国を築く者になり、地上に神の王国を

築く手助けをする者となるよう祈れと教えている。

神を愛して、神の王国が天におけると同じように地にも出現するように祈る時、我々は、自分の時間と才能、それに富を捧げると決心しているのである。

「父よ、みこころが天に行われるとおりの、地にも行われますように」と祈る時、私たちは、ちょうど小さな子供が父母の心に従うのと同じように、天父なる神のみこころと望みに従わなければならない。主のみこころが行なわれるようにと心から思い、同じ思いを持つならば、主を敬い、愛し、主と1つになるだろう。

イエス・キリストは、この地上に神の王国を築くために献身し、専心された模範であり、父なる神のみこころを行ないたもうた模範である。イエス・キリストはこう言われた。「わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。」(ヨハネ 6 : 38) またこうも言われた、「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。」(ヨハネ 5 : 19)

上の祈りはまた、我々がこの人生の試みや逆境に直面できるように父なる神に祈るよう指示している。もし神を愛し、神を信頼するなら、我々を悪から救い出してくれるよう神に願うはずである。悪から救い出して下さいと心から祈る時、安らかな心と慰めがある。我々は家族の祈りをする時、子供たち

に悪から救って下さいと主に祈るよう教えなければならぬ。あなたはいつ、悪から救ってくれるようお願いして、主の戒めに従ったのだろうか。またいつあなたの子供たちや、あなたのクラスの生徒に、そう祈るよう教えただろうか。私たちが悪から救われるために、主が私たちに支払うように求めておられる代価は、心から主に願うことである。上の祈りは次のような主に向かう言葉で閉じられている。「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。」この言葉は、私たちが皆求めている目標、すなわち神の王国に私たちの心をとどめさせる。

私はここで、この地上における神の王国建設を財政的に維持するために、主が与えられた律法を読みたい。それは、什分の一の律法であって、聖書に記録されている。主は言われた、「主なるわたしは変わることがない。それゆえ、ヤコブの子らよ、あなたがたは滅ぼされない。あなたがたは、その先祖の日から、わが定めを離れて、これを守らなかった。わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろうと、万軍の主は言われる。ところが、あなたがたは『われわれはどうして帰ろうか』と尋ねる。」

そこで主は言われた、「人は神の物を盗むことをするだろうか。」私の声の届く範囲の中に盗んでいる人がいる。「しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。」

そして主はこう命じられた、「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」

わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしようと、万軍の主は言われる。」（マラキ 3：6－11）

人は什分の一とささげ物を納めないことによって、神の物を盗むのだろうか。

第一の大切な戒めは、主なるあなたの神を、心をつくし、精神をつくし、思いをつくして愛することであることを覚えなさい。もしこの戒めを守ろうとするなら、我々は神の物を盗まないであろう。

私は自分の経験を思い出すことができる。何年前か、私と妻がまだ家庭を持って間もない頃、経済的に非常に苦しい状態にあった。借金があったので正

直に什分の一を納めていなかった。妻と私は教会に出席していたし、主を愛していたつもりであった。しかし、ある日妻は私にこう言った、「あなたは神を愛していますか。」それで、私は「愛していますよ。」と答えた。

彼女は言った、「あなたは食料品店の主人を愛している以上に神を愛していますか。」

私は「食料品店の主人以上に神を愛しているつもりだよ。」と答えた。

妻は言った、「でもあなたは食料品店の主人に支払っています。あなたはあの主人を愛するのと同じように神を愛していますか。」妻は続けて、「第一の、大切ないましめは、神を愛することでしょう。でも私たちは什分の一を納めていないのよ。」

妻と私は悔い改めて、什分の一を納めた。すると主は、天の窓を開いて、我々に祝福を注がれた。我々は、什分の一を主に納めることを、大きな特権であると考えている。

もしも主に正直でないならば、我々は混乱し、困難や問題が生ずることを申しあげたい。

我々は主の戒めを守ることによって、生活を完成させることができる。この大会で何度も引用されたように、主はこう言っておられる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」（ヨハネ14：15）

1831年に主は予言者ジョセフ・スミスに、次のように言われた、「……地より平和の取り去られ、悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしといえども今や近きにあり。」（教義と聖約1：35）

私たちは今危険な時代に住んでいる。多くの人が神を愛するよりは楽しみを求めている。悪魔は自分の領土に対して主権を握っている。しかし、この危険な時代にあっても、希望がある。主は今もこの教会の頭として生きたもう。この末日に生活し、しかも末日聖徒であることは、大きな祝福である。天の父なる神の子は、心をつくし、精神をつくし、思いをつくして神を愛し、神の戒めを守ることによって、平安、安寧、そして幸福を得ることができる。私は、神が生きておられ、贖い主もまた生きておられることを知っている。私は、自分が神の子であって、神により、神の姿、形に似せて創られたことを知っている。これは私の持っている最も大いなる知識である。神は私にこの知識を啓示された。それで私はこの証によって、大いなる平和と幸福を得ている。

私は、天父なる神に対して、また私の救い主イエス・キリストに対して、聖霊に対して、さらに全人類に対して、愛を持っている。このことをイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

あなたは姦淫

してはならない

我

々は今でもシナイ山で雷のように聞こえてきたエホバの声を聞くことができるようである。エホバはこう命じられた、『あなたは姦淫してはならない。』(出エジプト20:14)もう3千年以上もこの戒めは、ヘブル人の世界とキリスト教の世界に響きわたってきた。また何百万もの人々がこの言葉を指針として生活してきた。

この教会の多くの人々が、さらに全世界の人々が現在、昔から大切にされてきたヘブル人とキリスト教徒の貞潔の道徳の標準を捨てている。しばしば既婚者が姦淫を犯し、独身の人が感情に身をまかせて私通を行なっている。その結果は、不幸であり、愛の喪失であり、家庭の崩壊、家族生活の破滅、また離婚数の増加、恥辱、霊性の喪失、背教であり、最終的には、永遠の救いを失うことである。

最近、個人的に私の注目を引いた数多くの例のほんの2、3を引用しよう。数カ月前に、5人の子供を連れた母親が、私の事務所にやってきた。彼女は激しく泣きながら、夫が過去1年間のほとんどを他の人の妻と過ごしていたことを話した。彼女は、何度も自分の車で夫の後をつけて行って、その女性の居どころをつきとめた、と説明した。当然のことながらこの罪深い夫は、みじめであったし、妻は非常に悲しんでいた。そして子供たちの心は傷ついていた。「……罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ41:10)のである。

1年くらい前、1人の若い男性が私の事務所に来て胸が張り裂けんばかりに泣きながら語った。『私は2年ほど前に姦淫をしました。私はこの罪のため、精神的に苦しくて、もう耐えられません。もし破門されなければならないのでしたら、すぐに教会がその処置をするようにして下さい。私の苦しみは、口で言い表わせないほどのものです。この恐ろしい罪

男性も女性も、貞潔に関するキリスト教の標準を捨てて、完全な喜びを得ることはできない。

七十人最高評議員会会員

ミルトン・R・ハンター長老

の償いのために、私にできることは何でもしたいのです。

例をあげればきりがないであろう。しかし、この罪の重大さを示すには、この2つの例で十分である。

我々は今日非常に自由な社会に住んでいる。多くの人々は、昔のキリスト教の道徳を捨て、新しい道徳を受け入れることを主張している。この新しい道徳というのは、実際には、神が宣言した貞潔の律法に反して生活させようとするものにはかならない。我々は今日、性革命が宣言されている時代に生きているのである。不義な行ないに誘うものが、あらゆる所に存在している。小説、雑誌、映画、テレビ、そして広告等の中に見られるそういった誘惑は、日増しに増加の一途をたどるばかりである。

多くの宗教界の指導者は、この罪が存在することを教えなくなっている。貞潔について説教をして聴衆を動かしたり、姦淫やその他あらゆる不道徳な行為を糾弾するキリスト教の牧師はどこにいるのだろうか。一部の牧師や宗教上の教師にいたっては、最近の自由な考え方に改宗したり、そのような考え方の擁護者になったりしている始末である。

1970年5月17日に、何人かの著名なキリスト教の牧師が、ある大きなキリスト教会に提案されている新しい性に関する規則を3年がかりで研究して、その研究を完成したという記事が新聞に報道された。その教会は、はっきり姦淫を禁じているが、男女の行為について自由化された表現が委員会の報告の中に見える。それは次の通りである。

『我々は、婚外交渉が夫婦間の幸福という信仰上の事柄に関して必ずしも反しない例外的な状況があり得ることを認めるものである。』

……そのむずかしい決定は、例外的な行為をする

あなたは姦淫 してはならない

人が下し、責任を負うのである。ただ大事な点は、最後の裁定が聖書でもなく、教会でも神でもなく、個人であり、その人の良心であることである。」(ウィル・アウスラー「宗教上の嵐の日に新しい性の規則」パレード誌、1970年5月17日P.28)

この自由化、言いかえれば、いわゆる新しい道徳は、新しい衣服をまとった不道徳にすぎない。昔、人々は豊饒の神々、そして女神を拝んだ。彼らの儀式の多くは、全くの不道徳を中心としており、イスラエルの予言者たちはこれを絶えず非難した。

ノアの時代には、事実上すべての人が不道徳のために腐敗した。その結果、神は洪水で世界を滅ぼされたのである。

聖書には、この腐敗がなければ偉大な人物になっていた人のよい例が出ている。彼らは貞潔の律法を破った時に破滅の道をたどった。例えば、力持ちのサムソンは、女に対する情欲をおさえ切れないでいた。彼はデリラに裏切られ、最後にペリシテ人に鎖につながれて捕われ自殺した。神はソロモンを祝福して、大いなる知恵を授けられた。しかし、数多くのめかけで人生を汚してしまった。

主に愛され、多くの人々からイスラエルの最大の王と見られたダビデは、ウリヤに対して犯した罪とバテシバとの姦淫のため、後半生を悲しみの中に過ごした。彼の深い悲しみは、聖書の中でも最も悲しみにあふれた祈りである。

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、……
わたしの不義をことごとく洗い去り、
わたしの罪からわたしを清めてください。
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。」
(詩篇51：1－3)

救いの計画を理解しており、彼が犯した姦淫と殺

人の重罪がどれほど深刻であるかをわきまえていたので、ダビデ王は、苦悩の中に主に叫んだ。「…あなたはわたしを陰府に捨ておかれず……」(詩篇16：10)

ダビデの死後2千年以上たった、今から127年前に、イエス・キリストは天から語り、ダビデはウリヤとその妻に対する罪のため、「最高の栄に進むことより堕ちて」その妻たちは別の者に与えられた、と私たちに知らされた。(教義と聖約132：39)

おそらく聖書に登場する人物で、誘惑されたにもかかわらず貞潔を守った、堅固で高貴な男性の最も有名な例は、エジプトの侍衛長ポテパルの若くて目鼻立ちの整った僕ヨセフであろう。ヨセフは、ポテパルの妻の誘惑に抵抗し、彼女と姦淫することを拒んだ。ヨセフはこう言った、「……どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができますよう。……」(創世39：9, 12)そして彼は彼女の前から逃れた。

ヨセフは自分の理想を捨てるよりは、獄に入る方を選んだ。そして何年もそこに拘留された。

永遠の父なる神は、イエス・キリストを通して、人類に救いの福音の計画をもたらされた。その目的は、この福音を受け入れて従う人に、この世で平和と幸福をもたらし、最終的には日の栄で、神の御前に永遠の命をもたらすことである。この福音の計画において最も大いなる律法は、永遠の結婚に関する律法である。従って永遠の家族に関するものである。現世においても、来世においても、最も素晴らしい喜びと最も大きな祝福は、福音の計画に従って家族生活を送ることによって得られる。

このように、結婚の基本の律法は、貞潔の律法である。男性も女性も生命の源を汚しておきながら最大の喜びを刈り取ることはできない。幸福と清い心とは切り離せないものである。

貞潔の報いと姦淫の恐ろしい結果にどのようなものがあるだろうか。

モルモン経は、性的不道徳が深刻な罪であることを非常にはっきり述べている。アルマの息子コリアントンは、浮れ女イサベルと罪を犯していた。良い父であり、神の偉大な予言者であったアルマは、息子に次のように言った。

「わが子よ。罪のない者の血を流すことと、聖霊に逆うこととを除いて、このような行いはあらゆるほかの罪以上に、主の目から見て憎むべき行いであることを知らないか。」

「わが子よ、お前は悔い改めて自分の罪をすて、……そうでなくては、決して神の王国に住むことはできない。」(アルマ39：5，9)

あらゆる時代を通じて、神の予言者は、清くない者は神の王国を引き継ぐことはできない、と宣言してきた。(モーセ6：57，ガラテヤ5：19，21，1コリント6：9)

イエス・キリストは地上におられる時、精力をつくして貞潔の律法を教えたもうた。キリストは言われた、『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。(マタイ5：27—28)

イエスはまたこう宣言された、「心の清い人たちは、さいわいである。彼らは神を見るであろう。」(マタイ5：8)

アルマやイエスが貞潔について教えてから2千年近くたっている。神は貞潔に関する律法を撤回されたのだろうか。今日姦淫をすることは罪ではないのだろうか。

イエス・キリストはこの時代に天から語りかけ、御自身の福音と教会を回復された。キリストは、こ

のずっと昔に与えられた「あなたは姦淫してはならない」という戒めを、いくつかの啓示の中で再確認された。

たとえば、イエス・キリストは予言者ジョセフ・スミスを通して、教会員に次のような戒めを与えられた。

「汝ら誠心を以て妻を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ。

婦女を見て情欲の念を起す者は信仰に背くなり。『みたま』を与えらるることなし。もし悔い改めずんば、捨てらるべし。」(教義と聖約42：22—23)

ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは、姦淫を犯した者が死後星の栄でどのような目に合うかを示された。主は彼らに言われた。

「これらの者たちは偽りを言う者、魔術を行う者、姦淫を行う者、娼婦を買う者たちなり。

これらの者は、地獄に投げ入れられ、全能の神の怒りを受けて苦しむべき者なり。」(教義と聖約76：103，106参照)

主はこの神権時代の神権者に、次のように命じられた。

「……絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。

聖霊は常に汝の伴侶となり、汝の笏は真理と正義の変ることなき笏となり……。」(教義と聖約121：45—46)

私たちは、神の口から出するすべての言葉によって生き、清い思いを持ち、あらゆる清くない行為を避けようではないか。そうすれば、現世で喜びを得将来主のみ前にもどり、栄光と永遠の生命を与えられるように備えることができるであろう。

イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

サタンは実在する者であり、
強力な霊である。

大いなる偽り者 サタン

十二使徒評議員

マリオン・G・ロムニー長老



愛 する兄弟姉妹と友人の皆様、私は心からあなたがたの信仰と祈りに訴えたい。私はきょう主の敵である「大いなる偽り者—サタン」について話そうとしているので、特に主のみたまを必要としている。

神は死んだとする有害な虚偽の当然の結果として、悪魔はいないとする有害な教義が生じている。この2つの誤りの父は、実はこのサタン自身なのである。この2つの考えを信じることは、サタンに降伏することである。このような降伏は、人を破滅に導いてきた。今も同じである。そしてこれからもそうであろう。

末日聖徒は、神が実在することを信じている。同様に末日聖徒は、サタンが実在することを、そしてサタンが強力な霊であり、神と人と正義の第一の敵であることを、確かに信じている。

神と悪魔の両方が存在することは、聖典と人の経験から確実である。

前世における天上の大会議に関するアブラハムの記述から、神とサタンの両方がこの会議に参加したことがわかる。(アブラハム3：22—28)

この記事の中に驚くべき重要な知識が明らかにされている。それは、遠い過去の事物の姿や、父なる神とその霊の子に関する事柄や、この地球の創造についての神の計画の知識である。また福音の計画について触れており、キリストとサタンについて記されている。

主は、アブラハムに啓示された真理をもっと詳しくモーセに語られた、「汝がわが生みたる独子の名によりて退けと命じたるかのサタンは太初より在りし其者なり。彼わが前に来りて言いは、見たまえ、われ此所に在り。われを遣わしたまえ。われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以てわれに汝の誉を与えよと。」(モーセ4：1)

旧約聖書の予言者たちは、この大会議におけるサタンとその役割について知っていた。直接サタンに話しかけるように、イザヤは次のように言っている。

「黎明の子、明けの明星よ、

あなたは天から落ちてしまった。
もろもろの国を倒した者よ、
あなたは切られて地に倒れてしまった。
あなたはさきに心のうちに言った。

『わたしは天にのぼり、
わたしの王座を高く神の星の上におき、……

いと高き者ようになろう』
しかしあなたは陰府に落され、
穴の奥底に入れられる。」

(イザヤ14：12—15)

この最後の神権時代に主は、大会議におけるサタンの役割について、以前の神権時代に啓示されたことを、確認された。1830年の秋に、主は予言者ジョセフに次のように言われた。

「…悪魔はアダムより先に在りし者なり。彼、われに叛きて曰く、『われに汝の光栄を与えよ。その光栄はわが能力なり』と。かく言いて、また彼は天群の三分の一をその自由意志によりてわれに叛き去らしめたり。」(教義と聖約29：36)

1832年2月にジョセフ・スミスとシ

ドニー・リグドンは、示現の中に、次のことを見たと言っている。「すなわち、神の御前に於て権威ありし神の一天使、……神の生み給える独子に叛きて、神の御子の前より突き落され、天の衆群衆のために泣き悲しみたれば『滅亡』と呼ぶ。彼はすなわちルシフェルなり。暁の子なりき。」（教義と聖約76：25—26）

ジョセフ・スミスは、この前世の大論争を簡潔にまとめてこう言った、「天上の論争はこうだった。イエスは、救われない霊が出てくるだろう、と言った。ところが悪魔は、全部を救うことができると言った。そこでそれぞれの計画が会衆の前に提示された。会衆はイエス・キリストに票を投じた。そこで悪魔は神にそむいて立ち上がり、彼に味方して手を挙げた人全部と共に投げ落とされたのである。」（『予言者ジョセフ・スミスの教え』〔デゼレト出版社1968年〕P. 357〔英文〕）

サタンと彼に従った者たちは、投げ落とされて地球にやってきた。

モーセに示された示現の中で主は言われた。

「…サタンわれに叛きて、われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし、しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたるにより、われわが生みたる独子の権能によりて彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり、実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし、以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」（モーセ4：3—4）

サタンは、アダムとイブが墮落する前、エデンの園に2人と共にいた。そればかりではなく、二人がこの園を追い出されてからも、二人と二人の子らを誘惑し続けた。アダムとイブは福音を聞いた時、喜んで「神の御名を讃め、息

子娘らにすべての事を知らせたり。

ここにサタン彼らの中に来りて言いけるは、われもまた神の子なりと、また彼らに命じて言いけるは、アダムとイブの言を信ずるなかれ、と。されば、彼らアダムとイブの言を信ずることなくサタンを神よりも愛でたり。人はその時より、肉体、肉欲、悪魔に従う者となり始めたり。」（モーセ5：12—13）

その時以来、今日にいたるまで、サタンは地上にいる。ヨブ記に次のように書いてある。

「ある日、神の子たちが来て、主の前に立った。サタンも来てその中にいた。

主は言われた、『あなたはどこから来たか』サタンは主に答えて言った、『地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました。』（ヨブ1：6—7）

予言者ジョセフは、1831年8月11日付の日記に、次のように書いてある。

「私たちが川岸のマックルウェインの曲がった所でキャンプした時、フェルプス兄弟は、日中示現の中に、破壊者が恐ろしい力を発揮して水上を通るのを見た。他の者はその物音を聞いたが、示現は見なかった。」（教会歴史、第1巻P. 203〔英文〕）

サタンは悪い存在である。全くの悪であり、いつもそうである。サタンは福音の計画を打ち破ろうと求め、「人々の霊を亡ぼさん」とする。（教義と聖約10：27）

「…悪魔とその使たちまたは自分から悪魔に従う者たちは、…誰一人にも決して善いことをせよとすすめない。」（モロナイ7：17）

ゲッセマネにおける苦悩の直前の、最後の晩餐の席で、イエスはペテロに警告してこう言われた、「シモン、シモン、…サタンはあなたがたを麦のうにふるいにかけることを願った。」（ルカ22：31）

サタンが、人に及ぶイエス・キリストのみたまの影響に対抗し、その影響に打ち勝とうとしていることは、明白な事実である。サタンは、リーハイが息子ヤコブに語った教えの中の「すべての物事の反対のもの」の代表者であり、奨励者であり、擁護である。（Ⅱニーファイ2—11、14—18参照。）

サタンの方法は様々であり、よこしまでその数は無数である。

「…あらゆる可能な手段を使って、人の心を暗くしようとねらい、真理の姿を借りて偽りを持ち出す。サタンは巧妙な模倣者である。純粋な福音の真理がこの世にもたらされ、どんどん行き渡っていくと、サタンも対抗して偽りの教義を広めている。……『偽りの父』らしく、サタンは長い間邪悪な業を行なってきた結果、非常に熟練した者となり、できれば、選ばれた者をだまそうとしている。」（ダニエル H. ラドロウ「末日の予言者は語る」の中のジョセフ・F・スミスの言葉、〔ブッククラフト社、1948年〕P. 20—P. 21〔英文〕）

どの神権時代が始まる時にも、サタンは、真理が出現するものをまっとうから攻撃した。前に引用したように、サタンは、最初の神権時代にアダムとイブの息子、娘たちをだました。

モーセの神権時代の初めに、「サタン来りて彼は誘惑し言いけるは、人の子モーセよ、われを礼拝せよと。」（モーセ1：12）

イエスの時代に、サタンは主御自身を攻撃した。（ルカ4：1—13参照）

このサタンは、今の最後の神権時代が開かれる時にも戦いをいどんできた。予言者ジョセフ・スミスは次のように記している。

「…私は何とも知れぬ力によって捉えられ、ついに私は全く抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ったので私は物言

うこともできなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり、一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのよう思われた。」(ジョセフ・スミス2:15)

モルモン経がもたらされる時にもサタンは攻撃した。その詳細は教義と聖約10章に出ている。

サタンが福音の広まるのをとどめようとした他の証拠として、1837年に英国に福音を伝えようとした兄弟たちの攻撃がある。(オルソン・F・ホイットニー、「ヒーバー・C・キンボールの生涯」P.143-145)

一般に、「悪魔はないものであるから私は悪魔ではない」(Ⅱニーファイ28:22)というサタンの言葉が受け入れられているので、私たちの社会が退廃しているのもっともである。

我ら末日聖徒は、サタンが実在するかどうかについて、人の考えにまどわされる必要はないし、またまどわされてはならない。一個の人格を持った悪魔がいる。私たちはその存在を信じるべきである。悪魔とその無数のつき従う者が、目に見える者も、見えない者も、人々を支配し、今日の世界で人々の諸事を支配している。

ある昔のアメリカの予言者は、私たちの時代を先見し、何が起るかを観察して、もしサタンに気をつけなければ、この世代は破滅するだろう、と予言した。私たちの現在の状況に対してニーファイは次のように言った。

「悪魔の王国は必ずゆり動き、またこの王国に属する者たちも必ず動かされて悔い改めなければならない。そうでなければ、かれらは悪魔の永遠の鎖に固くしばられ怒らされて亡びてしまう。ごらん、その時〔それは今である〕に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ、またこの人たちに善い事を怒らせる。またほかの人々をなだめ、この人たちをすかして肉欲を

ほしいままにさせるから、その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれて行くのである。悪魔はまたほかの或る人々にへつらってこの人々を迷わせ、地獄はないものであると言い、また悪魔はないものであるから私は悪魔ではないと言い。このように耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐ろしい鎖でとうとう縛ってしまう。」(Ⅱニーファイ28:19-22)

さて、私は別に人をこわがらせたり、敗走させたり、勇気を失わせたりするために、こういったことを話しているのではない。私は以上のことが真実であると知っているので、また「サタンに打ち勝」ち、「また現にサタンの仕事に力を与えるサタンの僕らの手より免れ」(教義と聖約10:5)ようとすれば、あるがままの状態を理解し、認識しなければならないので述べているのである。今は、末日聖徒があいまいな言葉を使う時ではない。

またあわてまどう時でもない。私たちの時代の、困難は突然来たのではない。主は140年前に、私たちの時代の進路を明確に啓示された。救い主の再降臨が近づくにつれ、人々の霊に対するサタンの働きの速度が速められていることと、これからも速められることを我々は知っている。再降臨までの間が人々の霊を試す年月になることを、我々は知っている。

我々はまた、神が生きておられることと、神の「永遠のみこころが……続けて行なわれる」ことも知っている。サタンとその邪悪な部下に打ち勝つことができるよう、私たちにイエス・キリストの福音が与えられていることを私たちは知っている。キリストのみたまと、キリストの神権の力が、サタンの力に抗する十分な楯であることを私

たちは知っている。私たち1人1人に聖霊の賜物が与えられていることを私たちは知っている。この賜物は、悪魔を見分け、また悪魔がこの世代を容易にだましているにせ物を見分ける賜物を含んだ、啓示の力である。私たちの道は、はっきりしており、確実である。その道というのは、聖典に記録されている通りに、また生ける予言者によって与えられる通りに、主の戒めに厳密に従うことである。

終りに、私は今話したことが真実であることを証したい。

私は神が生きたもうことを知っている。私は自分の経験から、神のみたまと、神の力を今知っている。私はまたサタンも存在することを知っている。私は神のみたまと、神の力を発見した。予言者ジョセフと同じくらいとは言えないが、似た経験であった。

キリストの再降臨の時には、「サタンは縛られて、人の子らのところの中に入るべき所を与えられざらん」(教義と聖約45:55)ことを知っている。そのしるしが今始まっている。

私はさらに、次の救い主の予言が真実であることを証しする。それは、次の通りである。救い主が来られる時に「賢くして真理を受け入れ〔福音を受け入れ〕聖霊の導きに従い〔サタンとその群勢に〕騙されざりし者は、…その日〔救い主の来られる日〕に堪うるべし。地はゆずりとして彼らに与えられ、…主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き、主は彼らの王にして立法者たるべし。」(教義と聖約45:57-59)

我々が聖いみたまを導き手とし、サタンを認識し、またサタンの手下と彼らの言葉を見分け、彼らにだまされないようにし、約束された祝福を受けられるように、私はへりくだってイエス・キリストの名により知る。アーメン。



サンタクロース への手紙

もうすぐクリスマスです。でもマリアンの家は少しも楽しくありません。マリアンは今までのクリスマスのことを思い出しました。

パパはゆうびん局のまい子ゆうびん係のお仕事から帰ってきて、ニコニコしながらマリアンやおとうとやママに「ただいま」と言いました。いつも話されるじょうだんや、ねる前にきまって話してくれたお話は、なんと楽しくおもしろかったことでしょう。

しかし、それはおとうとが急に病気になるって、手あてをする間もなく死んでしまう前のことでした。今では、まるでマリアンのパパも死んでしまったように思われました。その時から、パパはわらうこともマリアンにお話することも、またきしめてキスもしてくれませんでした。ほんとうにパパは、マリアンやママが近くにいてもいなくても気にとめていないように見えました。

マリアンはそのことをママに話すことはできませんでした。それはママをもっと悲しませるだけでした。マリアンは自分の家が前はどんなに楽しかったか、また今はどんなに悲しいかをほかの人はだれもわからないだろうと思いました。でもある日のこと手紙をかくことを思いつきました。

そんな大切な手紙を全部ひとりでかくのはやさしいことではありませんでした。手紙をかきおわる

と、マリアンは北極あてに住所をかいて、町かどのポストに入れました。その手紙にはこうかいてありました。

サンタクロースさま、

わたしたちのいえはとてもかなしいです。ことしのはる、おとうとがてんごくへいきました。あなたは、わたしになにももってこなくてもよいです。ただ、もしできるなら、パパをぜひ、もとのようにしてください。パパはママに「らいせにいけば、なおるよ」といっていました。おねがいです。パパをなおしてください。

マリアンより

その手紙はゆうびん局のほかの人にしらべられずに、マリアンのおとうさんのまい子ゆうびん机にとどいてしまったのです。

その日パパが帰ってきた時、アームストロング家には、まるでもうクリスマスが来ているかのようでした。パパがドアをあけながら、ニッコリとわろっていたからです。パパは、ちょっとたちどまってから、いぜんにしたように大手をひろげてママとマリアンをいっしょにだいてくれました。

ルシル・C・リーディングによる
ほんとうのお話

デビーと おはなし板

デビー・ワトソンは、霜のついた窓を指でまるくこすり、そこから外を見ました。3日の間家の外でふきあれていたふぶきがとうとうやんでいました。アイオワの草原は一面の銀世界にうす青いかげを落としたおとぎの国のようでした。「うわあ、おかあさん！」デビーは思わず大声で言いました。「ねえ、見て。ほんとにきれいよ。」ふいにデビーは、耳の聞こえない、いとこのメアリー・ロウのことを思い出しました。メアリーはクリスマスの1週間をデビーといっしょにすごすため、次の日着くことになっていました。デビーはメアリーが話すことも聞くことも、できればあしたのクリスマスはどんなに楽しいだろうと思いました。

「こんなこと考えちゃいけないのかもしれないわ。でも楽しくないのは確かだわ。」デビーはそう思いました。

「もう見たわよ。今すぐいそがしいの。」

おかあさんが台所でクリスマスのパイを作りながら言いました。

デビーは台所へ行きました。「お休みのときに親せきの人たちが来ると楽しいわ。おじいちゃんやおばあちゃんはほんとにおもしろい——でもテッドおじさんとレアおばさんはどんな人か知らないわ。」

「それにあなたのいとこのメアリー・ロウ もね。」おかあさんはパイの皮に切れ目を入れながらそうつけ加えました。

「メアリーはあなたと同じ年ごろだから、共通点もたくさんあるはずよ。それにレアはおかあさんのたった1人の妹だから会いたかったのよ。だからみんながここにもどってくるのがとってもうれしいの。」

デビーは何を話したらよいかわかりませんでした。

おかあさんはデビーを見て言いました。「メアリー・ロウに会うのが心配なんでしょう。でもいけないことよ。メアリーはちゃんと特殊学校に行ったんだから、あなたもすぐにメアリーと話せるようになるわ。」

デビーは大きなスプーンでパイに入れるジャムをなめました。

おかあさんは続けました。「耳の聞こえない人は正直な人だって言うでしょう。」

「そうね。」デビーは答えました。でも、できるだけ親切にしてあげていっしょに楽しくすごさなければならないことはわかるけど、義務じゃなくて心からそうしてあげるためにはどうすればいいのかしら。デビーは考えました。

クリスマスの朝、デビーは外で明るい鈴の音がするのに気づきました。窓の方へ走って行くと、除雪されたハイウェイから1台の車が家に向かってゆっくりと近づいていました。車のアンテナに結びつけられた馬具用の鈴が陽気な音をたてているのでした。

ドロシー・

ダンステッター・ワーナー

絵 シェリー・トンプソン



その音は、デビーが味わいたいと思いながら今まで味わうことのできなかった喜びを、心の中にわきたたせてくれました。あんなところに鈴をつけたのはいったいだれなのでしょう。

おかあさんが玄関のドアを開けると、お客さんたちが荷物を持って車から出てきました。

デビーがかっている猫のマフェットは、いちもくさんに階段をかけ上がってかくれてしまいました。でも犬のボスコは

大声でほえながらうれしそうに飛びはねました。ボスコのようになれたらなあ。そう思いながらデビーは彼らに会いに行きました。

「鈴の音で来たのがわかりましたよ。」おとうさんは笑いながら言いました。それから1人1人抱きあい、キスをしました。デビーはメアリー・ロウをちょっと抱くだけでせいっぱいでした。デビーは、メアリーには口で言ってもわからないんだということをいっしょうけんめい思い出そうとしました。なぜなら、心からの歓迎の気持ちをこめて抱いてあげることをしなかったからです。

テッドおじさんはデビーを力強く抱きしめながら言いました。「この鈴はメアリーがつけたんだよ。この子はみんながどんなに鈴が好きかわかるらしい。耳が聞こえなくてもね。」

デビーはちょっと笑いました。そしておじさんからメアリーに目をうつしました。メアリーの暖かい茶色の目がうれしそうに光っています。デビーは気分が少し落ち着きました。

それからおとなの人たちは居間の方へ行き、デビーとメアリーだけが廊下に残りました。メアリー・ロウはまっすぐにデビーの方を見つめました。何かしなければ、デビーはほえんで、指で自分について来るように言いました。

メアリー・ロウはデビーについて寝室に行きました。デビーはドレッサーの引き出しから小さな包みを取り出して、メアリーに渡しました。メアリーはにっこり笑ってセーターのポケットから包みを出しました。

デビーが包みをあけると、中にきれいな腕輪が入っていました。止め金のところにかわいらしい人形がついています。デビーはメアリーにわかるように口を大きく開いて「ありがとう」と言うと、それを腕につけました。

自分の包みを開いたメアリー・ロウはうれしさのあまり大声を出したいようでした。金色のくさりのついたばら色のハートを手にして、メアリーはデビーを抱きしめました。「楽しそうね。2人ともいらっしゃい。食事の用意ができたわよ。」レアおばさんがドアのところから首を出してにこにこしながら言いました。

メアリー・ロウはデビーの肩に手をまわしながら食堂へ行きました。食卓について、デビーはほっと胸をなでおろしました。耳の聞こえない人のことを理解し、自分のこともわかってもらうのはほんとに骨のおれることだわ。彼女はそう思いました。さあ、大きながちょうの夕食以外には考える必要がないんだわ。

夕食はほんとうに楽しく、デザートを食べたからも話がはずみました。デビーは弟のビリーが食べ散らかしたあとをきれいにしなければなりません。その時、デビーは自分がメアリー・ロウをほんとうにもてなす方法があったらなあ



と考えているのに気づきました。

夕食のあとビリーを寝かせると、デビーは食堂にもどりました。するとメアリーが玄関のコートや帽子をおいておく部屋に行きたいことを動作で示しました。メアリーがえり巻きをつけたのを見て、デビーはメアリーが外に出てそりすべりをしたいのだということがわかりました。

そりすべりは、思っていたよりもずっとおもしろいものでした。何度も何度も草原の長いスロープをすべりおりました。後ろにはいつもボスコがついてまわりました。メアリー・ロウはほほを赤く染めて幸福そうでした。この時、デビーはもうメアリーの耳が聞こえないことをほとんど忘れてしまっていました。

メアリーが切株の上に立って、そこからやわらかい雪の上におれる遊びを始めました。おもしろそうだったのでデビーもやり始めました。2人は草原にプリントもようの布を作るように何度も何度も雪の中にたおれました。

太陽が沈み、つかれてからだも冷えてきたので、2人はそりをひいて家にもどりました。2人の顔は喜びにあふれていました。

家に入ってから、2人はビリーが猫に人形の服を着せるのを手伝い、みんなでおもちゃの自動車の上に乗せました。それからおやつ用に小さなサンドウィッチを作りました。

デビーは、メアリー・ロウが学校の一番の友だちのマーシーと同じくらい楽しいと思いました。そしてどうしても自分

の気持ちをメアリーに伝え、メアリーからも彼女の気持ちを聞きたいと考えました。

「そうだ、いい考えがあるわ、」デビーは急いで台所に行きおかあさんがいつも電話のそばにおいておく黒板を持ってきました。

書いている間メアリー・ロウはじっとデビーを見ていました。『メアリー、あなたといっしょにいるとほんとに楽しいわ。』

メアリーは、うれしそうにしながら返事を書きました。『私もほんとに楽しかったわ。もしよかったら、あした指話法と変唇法を勉強しましょう。』

デビーは大きな字で『もちろん』と書きました。

その夕方、家族みんなが暖炉のまわりに集まりました。おとうさんがバンジョーをひき、みんながそれに合わせて「ジングル・ベル」を歌いました。メアリー1人だけ歌いませんでした。その顔は喜びに輝いていました。

2人は、黒板のことを「おはなし板」とよぶようになりました。デビーはこう書きました。『あなたが私のいところで、ここに来てくれてほんとうにうれしいわ。』メアリーはそれを見るとにこにこ笑いながら、『私も同じよ。』と書きました。

それからすぐにそれを消してこう書きました。

『みなさん クリスマス おめでとう！』





清い水を 飲みなさい

命の水は福音の原則の中に見出される。

七十人最高評議員
ロレン・C・ダン長老

救

い主がヤコブの井戸でサマリヤの女に語った次の言葉について考えよう。「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしと与える水を飲む者は、いつまでもかわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永

遠の命に至る水がわきあがるであろう。」(ヨハネ4:13-14)

イエス・キリストの福音の救いといやしの原則を表わすのに、命を支える水——すべての人が生きていくのに不可欠な水にたとえられる以上に良い方法があるだろうか。

救い主はこの女に次のように言われたのだった。彼女がくんでいる井戸から飲んで、またのどが渇くだろう。

しかし、救い主の井戸から飲んで、教えた原則を取り入れるなら、2度とのどが渇くことはないだろう。むしろ養われ、永遠の生命を得るだろう、と。

私たちは今複雑でむずかしい世界に住んでいる。老いも若きも、あちこちさまよって、それぞれ自分のやり方でいろいろな井戸から飲んでいるようである。魂を養い始めるため、内なる渇きを満たす水を捜し求めているようである。

若い人たちは、いろいろな運動に参加している。あるものは人気を博している。多くの人が良いことを達成しようとし、ある者は好戦的である。おとなは仕事に何の満足も見出せず、おそらく結婚生活も不満の連続で、人生は空虚なものに違いない。ある人は自分が受け入れられない事柄を激しく非難しているが、自分が何を擁護しようとしているかを少しも知らないでいる。ある人は、麻痺に走り、霊的な経験をしているつもりでいる。しかし、陶酔を経験するたびに、苦しい憂うつも経験しなければならないことを知るのである。おそらくこれらの人々や他の多くの人々は、いくら価値があろうともその表面上の価値からというよりは、むしろ渇望する魂を満たそうとする内なる願いから、特別な問題を人の言うままに取り上げたり、予期しないような行動をしたりするのではないだろうか。

社会主義の道徳の井戸から50年間飲んできたロシアの人々でさえ、何かもっと心を養う物を求めているきざしがある。ジャーナリストであるポール・ウォールは今日のロシアにおける宗教を研究して、次のように言っている。「社会主義の道徳が良い行ないの公的な規準として受け入れられてきたが、今のソビエトの人が前任者よりよくそれに従っているかどうかは、議論の余地のある問題である。科学界に独自の見地があるのと同じように、宗教にも



清い水を 飲みなさい

独自の見地がある。宗教の復興は、共産主義の観念論者も説明できないでいる。彼らはこのことについては沈黙を守っている。」宗教に向かう動機は、主として若い人々によってかき立てられている、と彼は述べている。

この著者は、1人の平凡なロシアの婦人が、近所の若い技師であり、物理学者である人の訪問を受けた話を書いている。技師は言った。

「あなたは宗教を信じているのでしょうか。神について教えてくださいませんか。弁証法的な唯物論は、私を満足させないのです。私は神を信じる人の考え方を知りたいのです。」

人は、慢性の不信という悪い行ないによって、創造主の方を向こうとする心を完全に踏みにじってしまったり、自分が知らないことや経験したことのないものは受け入れまいとして自分をせばめたりしない限り、遅かれ早かれ創造主の方を向くものを根底に持っていることは、きわめて興味深いことである。

予言者アルマは、救い主について次のように語っている。

「ごらん、神はすべての人を招いて憐みに満ちた手をかれらの方へ伸ばし『悔い改めよ、さらばわれ汝らを受けん』と仰せになる。また主は言いたもう『われに來れ、さらば生命の木の実を食ひ、無料にて自由に生命のパンを食ひ生命の水を飲むことを得ん。…良い羊飼は今もあなたたちを呼んで招き、しかも自分の名であなたたちを呼んでおりたもう。その御名はすなわちキリストである。』(アルマ 5：33—34, 38)

アルマは、人々にイエス・キリストの福音に関することや、人が魂を養い平安を見出して、永遠の生命を得るよう準備するのに、福音がどのような働きをするか、ということをお教へてから次のように言っている。

「今私アルマもまた命令を私に下したもうたお方の言葉を借りて、私がすでにあなたたちに告げた言葉を守って行えとあなたたちに言う。私はこれを命令として教会に属する人々に語り、また教会に入っていない人たちは、あなたたちも生命の木の実を共に食べることができるよう、教会へきてすでに悔い改めた証拠にバプテスマを受けよと言って、これらの人々を導くのである。」(アルマ 5：61—62)

この最後の聖句が示しているように、人は救いの木の実をいつでもすぐに手にすることができる。しかし、食べなければ何にもならない。

私は数カ月前に私に会いにきた2人の青年のことを覚えている。2人は、神権指導者から神権昇進の推薦を受けていた。彼らは事務所に足を踏み入れた瞬間から、非常にまじめに、この教会の一部の教義や、教え、手続きについて質問し始めた。しかし彼らの態度は、敵対心のあるものではなかった。心から答えを求めていたからであった。

それで私は、そのように質問をしているが、実は何か根本的な問題があって、一連の質問が出てきているのではないかと聞いた。本当の質問は、この教会が真実のものであるかどうかということではないか。この教会が文字通りイエス・キリストの教会であるかど

うか。また本当に神の啓示によって導かれているかどうか。青年たちは、もしこういった質問に対する答えが得られれば、心に生じる他の質問は自分たちで処理できることを認めた。

私は2人に、ある実験を試してみないか、とたずねた。2人のうち1人が運動好きな青年に見えたので、この青年に向かってこう聞いた。「水の化学的な組成を知りたい時、近くの競技場へ行って、トラックを4周走るだろうか。」

彼は答えた、「そんなことはしません。」

「なぜだろうか。」私は聞いた。

「この2つはお互いに無縁だからです。」彼は答えた。

そこで、ヨハネ伝7章を開けて読んだ。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ 7：17)

キリストに関する事柄で実験しようとすれば、以上のことを霊的に試験しなければならない。それは知りたいと望むすべての人のために救い主自身が定められた試験方法で、実行してみるという試験方法である。

私は2人に、聖典を読んでいるか、と聞いた。

2人は言った。「いいえ。」

祈っているか、と聞くと、

「あまりよく祈っているとは言えない」と答えた。

知恵の言葉を守っているかと聞くと

「時々は」と答えた。

教会へ行っているかと聞くと、

「行かなくなった」と言う

私は2人に、3カ月の実験をしてみないかと提案した。2人はやってみようと言ったが、私が何を言おうとしているかを知るまでは、決心しようとする気配を示さなかった。

「この3カ月間、教会のすべての集會に出席して、話されることを注意深く聞いてほしい。そして、教師が明らかにした要点をノートして、それがどのようにあなたの生活に応用できるかも書いてほしい。」

2人はちょっと考えて、そうしようと言った。

「今からの3カ月間、あなたがたの生活にもう1度祈りを取り入れてほしい。夜と朝に。そして与えられている祝福に感謝し、この教会が真実の教会であるかどうかを知ることができるように、またあなたがたのしていることが意味のあることであるかどうかを知ることができるよう、神の助けを求めなさい。」

2人のうち1人は、自分で自分が不可知論者であると考えていた。そしてこの提案にしりごみした。しかし、最終的には、実験の前提として、神が存在するという仮定を受け入れ、彼が求めている光と知識を得るため、この神に祈り求めようと、この提案に賛成した。

私はまたこれからの3カ月間、アルコール飲料、タバコ、麻薬を遠ざけるように求めた。これには少し自信がなさそうであったが、2人はそうすると決心した。

私はまた、この3カ月間、道徳的に清くあって、救い主が教えた道徳の原

則に従って、生活するように求めた。彼らはそうしようと言った。また私はこの3カ月間にモルモン経を初めから終りまで読む計画を自分で立てるよう提案した。毎日数ページずつ、この書物が真実のものかどうか、真実神からもたらされたものであるかどうかを知ることができるよう祈って読むように。彼らは賛成した。

私はどんなことが起こるかを見越して、こう言った。「このことを友だちに言うと、彼らはきっと、『ダン兄弟は君たちをうまく押さえたな。』と言うだろう。君たちもこの実験の途中で一度ならずそう感じるかも知れない。しかし、そのような感じに負けて、しようと決めたことを途中でやめてはならない。もしこのことが問題になると思われる時も、決心を強く持って、そのまま続け、心から実験しなさい。そしてこの3カ月の実験から判断しなさい。もしうまく行けば、補足的なことであるが、仲間のことをよく思うようになり、関心を寄せるようになるだろう。また人に感謝するようになり、人のことを考慮するようになるだろう。」彼らは、この挑戦を受け入れて、立ち去った。

もちろん、本当に望んでいたことは、すべての会員が味わう権利を持っており、他のすべての人も、味わう権利を持っている経験をさせることである。次のブリガム・ヤングの記述はこのことを最もよく表わしている。

「現世の人が経験するものの中で、聖霊の証に匹敵するものはない。この証はもろ刃の剣以上に強力で、人の胸

の中で、燃えつくす火のように燃える。恐怖や疑惑を打ち払って、後には、ある物事や原則が真実であるという絶対的で、無条件の、そして論争の余地のない知識が残る。

この証は、忠実な聖徒たちを今まで支えてきた。そして永遠に彼らの道を照らすあかりとなるだろう。この証の力は、すべての物質や地上のものを超越する力を持ち、天父なる神との関係を、文字通りの脈打つ事実とするだろう。体と霊のすべての部分がこの証に反応する。魂はこの真理を知っており、その真理に沿って生きている。」

そこで私は、いろいろな井戸で水を飲んだにもかかわらず、魂の渇きが満たされないで、心に平和をもたらし、心を培うものを捜し求めている人に申し上げたい。教会員であろうとなかろうと、あなたがたに申し上げたい。来てこの井戸から飲み、味わって実験してみようではないか。そして魂から飲んで、もう渇くことがなく、イエス・キリストについての真の知識やキリストの教えや人生の目的についての知識を得て、喜びに満たされるかどうかを調べてみようではないか。

そしてこの招き当たって、私は、神が生きてましますことを証する。私は、神が生きてましますことと、イエス・キリストが私たちの贖い主であり神の御子であることを確信している。ジョセフ・スミスは確かに彼が見たと主張したことを見ている。私たちには神の予言者がいて、きょうこの席で管理している。私は以上の証をイエス・キリストのみ名により証する。アーメン。

「そのぞうきんで足をふいて。」108隊の上級班長であるマーク・セデリンは、少年たちが古い丸太作りのスカウトの小屋に入る時、こう注意した。マークのきれいな肌はきちんと整えられた黒い髪と好対照をみせていた。彼のスカウトの制服のズボンは、1週間毎にふくらはぎに近づくようで、それでも縮んでいくように見えた。彼はもうすぐエクスプローラーになろうとしていたので、新しい制服を買うのはむだに思われた。彼はイーグルスカウトになる条件をぜひ満たしたいと思っていた。

会合が終ると、マークはうしろの方に残っていた。彼の隊長であるジョー・パーマーは、テーブルで書類を整理していた。隊長は顔をあげてマークを見た。「やあ、マーク、いつ奉仕計画にかかるつもりだい。奉仕計画をしないとイーグルスカウトになれないよ。」

マークは答えた、「はい、わかっています。パーマー兄弟そのことでお話したいんです。家族と一緒に奉仕計画として何をするか決めました。」

「よろしい、何をするかにしたんだい。」

「ぼくはサンタの代りになるんです。」

隊長は驚いて腰を抜かさばかりだった。

「君はやせすぎているよ。わかった、君は本当はぼくに代役をしてほしいのじゃないか。そうだろう。」こう言って、ジョーはマークの腰を軽くたたいた。

マークは笑って言った、「それは考えていませんでした。」

「そのためにどのようにしてお金を稼ぐつもりかね。」隊長がたずねた。

「ぼくのしようとしていることがどうしてわかったのですか。ぼくは、『虎は歩く』という映画を借りる計画を立てて

います。きっとMIAホールを借りる許可が得られると思います。近所の人も映画に協力することによって、参加できますから、これは地域社会の企画であると思います。こんな切符を作ろうかと思っています。」それにはこう書いてあった。

虎は歩く

第2ロード部

12月15日

会費 大人75セント 子供35セント

マークは続けて、「ポップコーンとキャンデーを売って余分にお金を稼ぐんです。利益を使ってある家族のクリスマスを祝うのです。この奉仕計画でたくさんのかことを学ぶことができると思うんです」と言った。

「もちろんだとも」と隊長は賛成し、「ところで、映画がうまくいかないで、利益があまり出なかったら、どうする」と言った。

「どうしても成功させます。もし隊員も切符を売って、この夜ポップコーンとキャンデーの販売を手伝ったら、彼らもこの催しに参加することになるでしょう。彼らもこのクリスマスで奉仕するんです。」

「相手の家族はどうするのかね。」

「お母さんが、町会に電話して、困っている家族を捜してもらっています。必ず1軒見つけます。」マークはこう返事した。

「この計画を実行すると君のクリスマスはなくなるよ。」隊長は注意した。

「かまいません。ぼくは何も求めています。ぼくは今まで、だれかがサンタ役をしなければクリスマスを祝えない人がいるなんて知らなかったんです。」



スカウト のサンタ

隊長はうなずいた、「ぼくたちは君たちを応援するよ。とてもいい考えだと思う。」

このあとの2週間は、忙しい期間であった。学校にいる時も、マークはその計画のことばかり考えていた。しかしすべてが終って、利益を数えた時彼の心は喜びで一杯だった。70ドル以上も利益があったのである。教会で彼に握手を求めながら、「このお金をあなたの企画のために使って下さい」と言ってくれる人や、特別な寄付を申し出てくれる人もいて、マークにはうれしい驚きだった。

町の機関は彼に、母と4歳の男の子と6歳の女の子からなる家族を割当てた。マークと母親は、その家族がクリスマスに何を必要としているかを知るため、スミス夫人を訪れた。彼女は戸口で2人とあいさつした時、失望の念をかくすことができなかった。彼女は、ひたいに手を当てて、「お金持ちだけがこういうことをすると思っていた。だのに男の子をよこすなんて。」彼女はやっとのことで涙をこらえている様子だった。

「きっとお子さんのために良いクリスマスができると思えますわ。子供さんたちは何を必要としていますか。」セブリン夫人がこう聞いた。サンタに扮したスカウトは、リストをもとに動き始めた。

クリスマスの朝、マークは、ほかのだれよりも早く起きた。「みんな、クリスマスおめでとう。」彼はこう叫んだ。彼はむしようにうれしかった。セブリン兄弟の家族が包みを開いていると、電話が鳴った。マークが受話機を取った。「ク

リスマスおめでとうございます。」と彼は明るくあいさつした。

「サンタですか。」声はこう確かめるように聞いた。

マークはスミス夫人の声を聞き分けて、「はいそうです」と答えた。すると相手に沈黙があった。彼の心は沈んだ。失敗したのだろうか。

「私……」再び沈黙。そして「1人の男の子がこれまでになかったほどのすばらしいクリスマスを私たちに過ごさせてくれたのです。それを知らせようと思って。どう感謝してよいかわかりません。」マークは、スミス夫人の子供が彼に話しかけようとわいわい騒いでいるのが聞こえた。それから30分、彼らは今度のクリスマスがどれほどすばらしいものであったかを、胸をはずませながら彼に話すのであった。

受話機を置いた時彼の褐色の眼は輝いていた。「うああーこんなすばらしいクリスマスは初めてだ。人のことを考えて人のためにする、しかも知らない人のためにしたんだ。これが本当のクリスマスの精神なんだ。」

2週間後、マークは、スカウト小屋のセメント床にすわって、彼のイーグルになるための企画についてその結果を報告した。それをジョー・パーマーは聞いていた。そしてこうたずねた。「君は、今度の経験から与える喜び以外に、何を学んだと思う。」

「1人では何も価値あることはできないと知りました。家族全員と、隊員でやったんです。」

「ほかに。」ジョーは促した。

「はい、それにお母さんがあんなにいろいろ手伝ってくれらることに今まで気づきませんでした。それで今は、イーグルスカウトのお母さんがいつも息子と一緒にピンをもらうわけがわかりました。」

(実話)

ドラ・D・フ ラ ッ ク

さし絵=デール・キルボーン





たとい死の陰 の谷を歩むとも

メルビン・ドグロー
絵 リチャード・バード

ジョタンのことはかすかにしか覚えていない。何年も年月がたった今では、中央ノルウェーの子供の頃の記憶は薄れてしまった。しかし、こうして舞い踊る白い小さな雪の粉を見ていると、ジョタンのことと、何年前の

メルビン・ドグローは、図書館で反モルモンの本を読んでいて、教会に深い関心を持つようになった。今は改宗して6年になり、セントルイス(ミズーリ州)第1ワード部の活発な会員である。

クリスマスのことが次第に胸によりみがえってくるのである。

それは1918年のことだった。ノルウェーのジョタンの北の谷では、まれに見る厳しい冬を迎えていた。父はジョタンの谷で小さな農場を営んで苦労していた。その農地は、西大陸に豊かにあるような肥沃な土壌には恵まれなかったが、何とか食べていける生活だった。いつも苦しい生活で、ぜいたく品を持つようなことはめったにならなかった。

私たちは皆忍耐強くクリスマスの日を待っていた。12月初めに家を飾り始め、次の数週間、私たちは古い歌のまわりに集まって、クリスマスの歌を歌った。救い主の誕生日の精神が感じられるにつれ私たちは楽しくなり、家庭内に絶えず笑いがあり、また敬虔

にもなった。

幼い妹たちと私は、ソリーにつける小さな飾りを切り抜いて、聖ニコラスが訪問するあのすばらしい夜のために準備したのだった。

私の記憶に深く刻み込まれたあのできごとが起こったのは、クリスマスの前夜のことだった。私は納屋からミルクを持ち出して、降ったばかりの雪を踏みしめながら、明るく電灯をともした小さな家に向かって歩いていた。空気は身が引きしまるように冷たく、星は頭上のまっくらな空にきらきら輝いていた。

突然私はその音を聞いた。それはかすかな、しかし鋭く割れるような音で谷にこだました。私は両手にミルクの入ったバケツを持ったままその場に立ちすくんだ。しかし、小さな台地と広大な谷はふたたび沈黙を取りもどし、もとの静寂があたりを包んでいた。私は耳をすました。体の全神経を集中させた。何か聞こえるものがあれば、どんなものでも捕えようとするかのように。その時間は永遠にも似た長さであった。

ふたたび音が聞こえてきた。1回目よりもはっきりしていた。それはきしめるような、割れるような音であり、遠い頂からのこだまであった。

私は前にこの音を聞いたことはなかったが、それが何の音であるかを知っていた。これまでの何年間もの間に、積み重なった何百万トンもの氷が、巨大な頂からゆっくり滑り落ちているのだった。

私は家に駆け込むやいなや興奮して叫んだ。言葉はのどに詰まるとぎれとぎれになった。「お父さん、氷が落ちるよ。今割れる音を聞いたんだ。谷

に落ちてきて、村の人全部が死んでしまうよ。」

私の声は、錠をおろしたようであった。父は何も言わずにすばやく私のそばにきた。父は私が聞いたものを疑わなかった。父は私の恐れている表情からすべてを読み取っていた。父は戸を開けて、黙って立った。急に冷たくなった部屋の中で、父のはく息は白く変わっていた。私たちの方を向いた父のハンサムな顔は、とても悲しげに見えた。そしてまゆげの線も憂いを含んで見えた。彼の短い言葉は、決定的であった。「あれはゴールドホーピングの氷だ。下にいる人々に知らせなければ」

もし氷が滑ったら、谷全体になだれが押し寄せて、気がついた時には恐怖の中ですべてが滅びていくのである。私の姉が生まれる1年前にこのような災害が起こり、父の両親が命を失っている。

父はすばやく考えた。時間が相手であった。深い雪が行く手をはばんでいる。夜には見分けられない危険な粉雪に簡単に転倒してしまうかも知れない。またもどってくる前になだれが起こったら、谷で人々と一緒に死んでしまうかも知れない。

私たちの家は、小さな台地の上に建てられていたので比較的安全であった。谷は南にかけて急に深くなっていた。谷の下に9軒の家があり、父は1軒ずつ知らせて台地にもどってくるはずだった。

母と姉妹と私は揺れるろうそくの光にくぎづけされたように小さな部屋に一晩中すわっていた。

ろうそくの黄色い光は私たちの影を無気味に壁にうつしだす。氷の割れる音は今や散発的に谷全体にこだまして、耳に入ってきた。おそらく1回に数センチ、あるいは数十センチずつづつ落ちているのだろう。あと何秒したら、何分たったらあるいは何時間したら、下

の谷に災害が及ぶのだろうか。

朝の最初の陽の光が窓辺に射し込んできた時、私たちはこの特別な日、クリスマスのことを考えた。またそれと同時に、神の力に支えられ、この危険な使命に向かって谷のどこかを歩いている父のことを考えた。

外はひどく寒かったが、空は明るくてすがすがしいほどであった。そうこうしているうちに戸口に集まって眺めていると、人々が一団になって雪で歩にくい道をゆっくり登って来るのが見えた。ひげをそっていない父が先頭を歩いていた。

あの安息日の朝11時13分にゴールドホーピング山全体が谷に大音響を立ててなだれ落ち、すべてを破壊しつくした。家は1軒も残らず、もどる家はなかった。しかし人々は生きていた。そう、その日はクリスマスだった。村が全滅したにもかかわらず、私たちはその日喜びで一杯だった。そして私たちの命を救った優しく愛ある神に感謝を捧げた。

今私は椅子からからだを起こして、窓辺に立ち、小さな雪が窓ガラスに残るのを見た。あの重大な出来事が起こった日のことが思い出されて、涙が目に浮かんできた。窓から家の中に視線を移すと私の心は暖くなった。今年の私たちのクリスマスツリーは大きくない。だが私たちの孫への贈り物が、クリスマスの朝に、目を輝かせた子供たちによってその包みを開かれるのを待っている。幼くして罪のない彼らは、何年も前のジョタンの冬のことをまだ知らない。しかし大きくなったら知らせよう。これは彼らがまたその子らに繰り返し伝えるべき物語だからである。

父親の物語を思い起こすことは人に良い影響を与える。これは謙遜な喜びをもたらす、クリスマスの思い出がなくなっても、長く永続する精神を人に与える。

歳の誕生日にアメリカ・ウォラスは鏡をのぞき込んだ。そこには年取った女の顔がうつっていた。最初、こんなにしわが寄っていて髪が白く見えるのは、暗い電灯のせいだと思っていた。しかし、明るい台所に駆け込んで、戸の後ろについている小さい鏡を見ると、同じ陰気な年輩の顔が見返していた。

「70歳。どうしてこんなに早く年をとったのだろうか。」彼女はこうつぶやいた。

彼女がまだそうして情なさそうに自分の顔を見ていると、夫のハーベイが裏の戸からあわただしく駆け込んできた。

「朝ご飯はできた？」彼は言った。「今朝養樹園へ行って、あと何本かりんごの木を取ってくるよ。垣に沿ってあと3本か4本植える余地があるから。」

ハーベイとりんごの木、彼は、今の町の小さな土地では、前の農場の果樹園のようにはりんごが取れないことがわからないようだった。

「ハーベイ、今日は私の70歳の誕生日だよ。」アメリカは言った。

ハーベイは下を向いて、「アメリカごめん。すっかり忘れていた。チョコレート1箱も用意しなかった。」

アメリカは腹を立てて言った。「ハーベイ、チョコレートはいいのよ。わからないの。私はきょう70歳になったのよ。70歳よ。」

ハーベイは理解できないで、目をぱちくりさせていた。「だって、69歳のあとは70歳だろう。」

「ハーベイ、私はもう年寄りなのよ。」アメリカは静かに言った。

ハーベイは近くに寄ってきて、顔を見つめた。「ぼくは年とって見えないけれど。」彼は青い目を輝かせながら続けた。「君はまだ25か30で通るよ。」

これまでなら、彼女は笑うか、彼の手を軽くたたか、あるいは彼の滑らかな頬にキスするかしたものである。しかしきょうは、ただ顔をそむけてこう言った。「卵を料理してあげましょう。」

彼女が食事の用意をしている間、ハーベイは威勢よく手を洗い、2人のために食卓の準備をした。そして、その間ずっと、りんごの木をもっと植える計画について話していた。

「カレンの店の農産物部門にいるビルを知っているだろう。彼はぼくのりんごを全部買ってくれるって。ぼくのりんごはこの辺で一番良いそうさ。お客がぼくのを買ってくれるんだ。」彼は、鼻高々に言った。「もう何本か木をふやせば、数年の内にうちのだけで荷造りができるようになると思うよ。」

アメリカは彼の話をほとんど聞いていなかった。4年から5年先のことがどうして考えられるだろうか。彼は自分が今75で、その頃には80になっていることがわからないのだろうか。

アメリカは、朝食の間ほとんど口をきかなかった。しかしハーベイには言うことがたくさんあった。「君の庭に新しいバラを6本持ってきてあげよう。この方がチョコレートよりも良い誕生日のプレゼントだろう。バラは何年も楽しむことができるよ。」彼がこう言って養樹園の方へでかけた時、アメリカはうれしかった。

彼女は、夫が使い古した小型トラックに向かって口笛を吹きながら歩いていくのを見た。農場を売っても、このトラックは持っていたいと彼は言っていた。彼の足どりは軽く、やせ気味の

からだは今もしゃんとしていて、背中はまだまっすぐであった。彼女は彼が時々リューマチに苦しんでいることを知っていたが、それも嘘であると思わせるほどであった。「年をとっているのに一体そのことを考えたことがあるのかしら。」彼女はそう思った。きょうはどうしてもあの陽気な調子が耐えられない、ドラに会いに行こう。ドラなら慰めてくれる。ドラはいつもたくさん写真をアルバムにきちんと整理していたので、若くて美しい時のことを思い出すことができた。

ドラは喜んで会ってくれた。「ちょうどあなたのことを考えていたのよ、アメリカ。」ドラはそう言って、この訪問者を暗い居間に案内した。いつもは暗い部屋に閉じ込められるのに閉口していたアメリカも、きょうは何となく気持ちが落ち着くのだった。

「私は今、アーサー・ブロンソンがもどって来たことを、家から送られてきた新聞で読んだところなのよ。それで彼が高校の国語の教師だった時のことや、私たち女の子全部が先生に夢中になっていたことを思い出していたの。新聞にはこれが彼の最初の任地であると書いてあるから、彼は出発点を見にもどってきたんだと思うわ。」ドラはこう続けた。

「私は彼をよく覚えているわ。私たちは先生を喜ばせようとして、あの年国語をいっしょうけんめい勉強したわね。彼はとてもハンサムだったから。」

ドラは新聞を取り出して、その中から1枚を抜き出した。「この彼を見てよ。」彼女は言った。

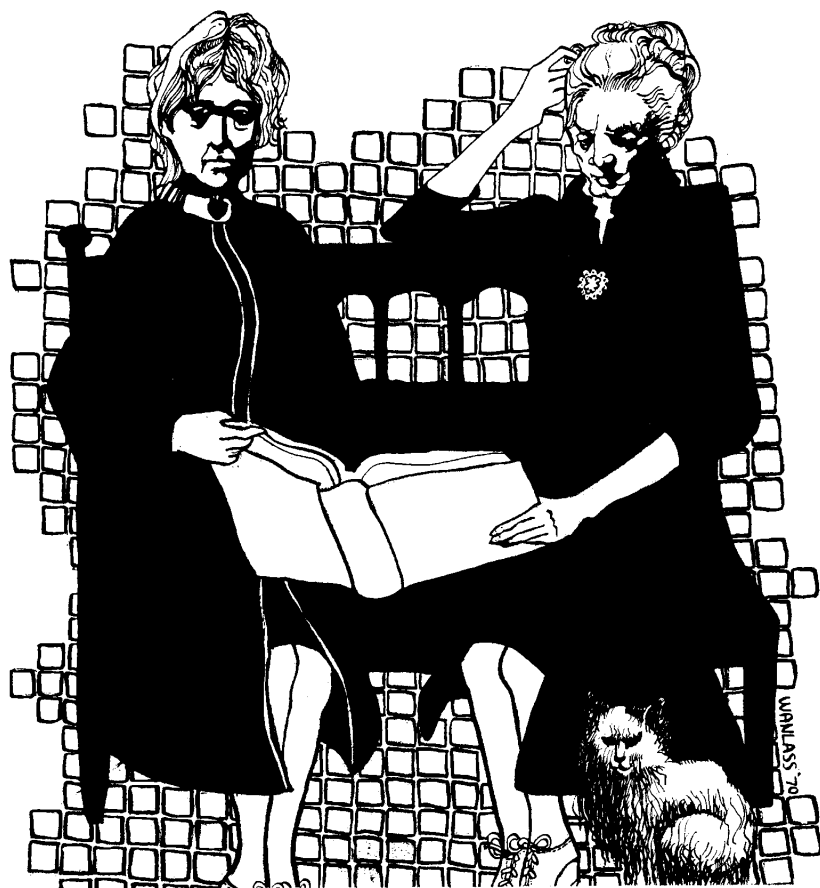
アメリカが見た写真は、背中の曲がった、しらがまじりの老人であった。ただ一つ残っている者のおもかげは、今でも輝く黒い目であった。アメリカの心は重くなった。

「彼は変わったわ。そうじゃなくなつて。」彼女はこう言った。

ラエル J. リットケは、カリフォルニア州東パサデナワード部の日曜学校の教師であり、主婦であり母である。彼女の作品は最近「レディーズ ホーム ジャーナル」や他のアメリカの雑誌に掲載されている。

方向の問題

ラエル・J・リットケ



ドラも顔をくもらせながらうなずいた。「この写真を見た時泣きたくなったわ。私は、みんなで彼に恋した時のように若くてロマンチックな先生を心に残しておきたいわ。ちょっと待って。私たちの、卒業の時の写真を捜すわ。彼は私たちのクラス担任だったからのってるはずよ。」

ドラはアルバムのページをくって、メルトン高校の3年生が23人写っている写真のところを開いた。「これを見て、みんなとても若いわ。」

アメリカは、アルバムに顔を近づけ

て、若い先生のハンサムな顔を見た。そして他の若い顔を見た。ある人は笑っており、ある人はまじめな顔をしていた。彼女の顔は夢見るようであり、目は遠くを見ていて、唇にかすかな笑みがあった。彼女は、50年以上も前の18歳の女の子の顔をもう1度思い出そうとしたが、その女の子は別人のように思われてくるのだった。70歳になった彼女には思い出せないのである。彼女は恐らく、このハンサムで若い教師のまわりに、空気の城を築いて、愚かな女の子より少しだけ偉い人であるか

のように感じていたに違いない、彼女はそう思った。

彼女は皆の顔の中から、ドラの顔を捜し出した。そして自分がビル・ノールトンのそばに立っているのを見た。ビルは数年後に彼女の夫になった。ドラとビルの顔はまじめな顔であった。

「あの日何を考えていたか覚えてて？」アメリカは突然たずねた。

ドラはアルバムに顔を近づけてうなづいた。「高校を卒業するに当たってビルと私はそれまでの楽しかった思い出を語り合ったわ。」

アメリカは少し笑った。「将来いろいろなことが起こるのに、そんなふうに考えたなんておかしいわね。」

ドラはうなずいた。「でもそれも全部すんでしまったんだわ。」彼女はエプロンのポケットからハンカチを取り出して涙をふいた。ドラは何を見てもいつも涙を流すのだ。「そうだわ、アメリカ。子供たちが小さかった頃のことにもどりましょう。それとも彼らが大きくなって、いろんなことをした時にもどりましょうか。あの頃が一番良かった時だわ。違う？」

アメリカは、これまでの長い日々をふり返った。一番良かった時と言われるとむずかしかった。「ずっと良かったわ。いっしょうけんめい仕事をしてもしろしとお金にならなかった時があったけど、でも良かったわ。」そう、そんな時でも良い時代だった。そういった時代のことを覚えているのは楽しかったが、アメリカは自分がその時代に帰って行って、もう1度そのような生活をしたのかということ自分でも全くわからなかった。いつも若い時は、生活がもっと良くなることを待ち望んでいた。昔の時代にもどろうとするのは、どういう意味があるのだろうか。

アメリカは言った。「ドラ、今日は私の70歳の誕生日なのよ。覚えてた。」

「いいえ、そうなの？」ドラは、だ

れかに屋根が落ちたと言われたかのよう
に言った。「では私は来月70になる
のね。」ドラは頭を振ると、アメリカ
がさっき考えたことと全く同じことを
言った。「まあアメリカ、どうしてこ
んなに早く年をとったのかしら。高等
学校を卒業したのはきのうみたいに思
っていたのに。」彼女はまた背中を曲
げてアルバムを見た。「みんなを見て
よ。この頃は何か大きなことをしよう
と思っていたわ。」彼女はため息をつ
いた。「たぶん誰も大したことはでき
なかったわ。それにもう遅いわ。」

アメリカは真顔になって言った。
「ドラ、私たちが何も大したことがで
きなかったってどうしてわかる。そり
ゃ、私たちの名前が新聞の第一面に載
ったことはないかも知れないわ。でも
いい生活を送ってきたし、良い家族を
築き上げたわ。子供たちが何をしてい
るか見てよ。あなたのビルは名をなし
ているし、私のデビッドも、他の子も皆
よく頑張っているわ。私がしたことと
言えば、ただ子供たちを愛し、手製の
パンを作ってやったことぐらいかも知
れないけれど、子供たちがそれぞれの
道を歩み始めたのを見る時、私は自分
の働きが役立っていたと考えたいわ。
それに、アーサー・ブロンソンが教え
ていた間に与えた影響を考えてごらん
よ。」時刻が遅くなってくると、アメ
リヤは、ハーベイが今も果樹園で働い
ており、立派なりんご栽培者として少
し名声を博していることを考えた。

ハーベイのことを考えると、彼女は
急に家に帰りたくなった。「もう帰る
わ。ドラ。」彼女はこう言った。「ハー
ベイはもう帰ってくる頃だわ。私がど
こに行ったのかと思うだろうから。」

ドラは芝生の中の門のところまで一
緒に来た。「ビルはあなたに会えない
と残念がるわ。彼はとても寂しいの。
けさ散歩にでかけたの。何もすること
がないのよ。ただすわって、前のよう

に働けたらいいのと言うだけ。」ア
メリカが歩き始めると、彼女は手を振
った。「また来てね。」

アメリカはハーベイよりも先に着い
た。彼女は夫の楽しそうな口笛が聞こ
えるのを待ち遠しく思った。ドラもビ
ルも、そして自分もこんなに年とった
と感じるのに、彼があんなに若々しく
見えるのはなぜだろうか。ただ彼の性
格が陽気なのだろうか。彼はなぜあ
も陽気なのだろうか。

小型トラックのエンジンの音を聞くと、
アメリカは外に出て夫を迎えた。

トラックのエンジンを止めるとハー
ベイは言った。「君が好きになれそう
なバラを少し持ってきたよ。」「つる
バラだ。」彼はきしむドアをあけてト
ラックをおりた。「君はいつもバラの
家を欲しがっていただろう。南東のす
みに柵を作って、そのまわりにはわせ
るんだ。2、3年もすると、バラに囲
まれすわることができるよ。」



また始まった、何年か先のことを考
えて物を言っている。

「それはすばらしいわ、ハーベイ」
彼女は、夫がトラックの荷台からバラ
の苗木とりんごの若木を出すのを見て
いた。「ハーベイ、あなたは私たちが
若かった頃のことを考えることがある
？あの頃私たちがしようとしていた
ろんなことを。」

「いや、あんまり。」彼は手押し車
をつかんで、植物を一杯に積みながら
言った。「今しようとしていることを
考えるので忙しくてね。」手押し車
の取手を握ると、ハーベイは小さな果樹
園の方へ押して行った。

これなんだ。ここに違いがある。ハ
ーベイは、前方を見ている。今するこ
とや、これからすることを捜してい
る。ところがドラもビルも自分自身も
過去の方を向いている。すでにしたこ
とを見ている。若かった頃人生がおも
しろかったのは、いつもこれからのこ
とを考えていたからであった。自分が
年をとっていると感じるか、若く感じ
るかは、どちらを向くかその方向に大
きく左右されるのだろう。

彼女は夫の口笛を聞いてほほえん
だ。アメリカは自分でも口笛を吹きた
くなくなった。今でもやることはた
くさんあった。まずあのバラを植
えて、完全にバラに囲まれてすわ
ること。

「そうよ。70になったからってど
うだって言うのよ。」アメリカは声
を出して言った。そしてトラックの
サイドミラーの角度を変えて、自
分の顔を見た。するとその顔はほ
ほえんでいた。髪の毛は白くな
っていたが、柔らかく輝いていた。
そして目は輝く顔の中で楽しそう
にきらめいていた。

あら、私は少しも70になんて見え
ないわ。アメリカはこう思った。少
しも / 65でとおるわ。

クリスマス——幾多の思いが交錯する時——子供たちはサンタ・クロースの訪れを無心に待ち望み、愛する人々は共に家に集い愉快で楽しい時を過ごす。また時にはひとりになって物事を真剣に考え、広い心をもったより良い自分が現われる……あらゆるものが、多少の忘却と寛大な心、さらに過去のクリスマスの思い出と共に今この瞬間に1つにとけ合う。

ああ、親たちよ、願わくば、子供たちに楽しい幸福な思い出を残されんことを。甘やかさず、気まぐれな気持ちをすべて満ちそうとせず——愛と励ましの思い出を、平和と一致と幸福な家庭の思い出を——どこにあらうとも、常に、永遠までも彼らの人生を祝福し鼓舞する思い出を与えられんことを。この時期は、またたく間に来てまたたく間に過ぎる。人生もまた同じ。ああ、あらゆる触知し得るもののほかに悔改めと向上の気持ちを胸に抱き、正直と自尊心を身につけ、精神と思いとみたまとの平衡を保ちながらこの時期を生きようではないか。当然のことながら人は降誕された御方を無視してこの時期を考えることはできない。平和の君、神の子、我々の救い主そしてあがない主、我々はこの御方の実在を魂の奥底から証する。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる」と。ああ、いかなる時も主の恵みたもうことを忘れぬように。世の苦しみを誇張しすぎることをないように。ロングフェロー¹の希望あふれる感動的な調べを胸にひめ、忍耐と感謝と行く末への確信とを持って歩んで行こうではないか。

クリスマスのなつかしい

鐘は鳴る

地に平和、人に安き

あれとうたう

平和の歌は空しく

ひびけども

地には望みもなく

うなだれてあり

その時さらに鐘は

ひびきわたる

「神は生きたもう

地に安きあれ」と²

1. ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー 米国詩人、

ハーバード大学教授、1807—1882。

2. 「クリスマスのなつかしい鐘は鳴る」より。

クリスマス

子供たちへの思い出のために

リチャード・L・エバンズ



リチャード・L・エバンズ長老

1906 — 1971

十二使徒評議員会補助

マリオン・D・ハンクス長老

1971年11月1日のリチャード・L・エバンズ長老のこの死すべき世からの急逝は、我々にはかり知れない、限りない空虚さを残した。この衝撃は、遠い所に、高い所に、つましい家庭に、そして急逝を容易に信じようとしなない人々の心の

中に、詩人エバンズがかつて語った次の言葉のごとく次第に強く押し寄せた。

「緑深き枝の巨大なヒマラヤ杉が
大音響とともに倒れ
そこに空虚な風景が残るごとく」



リチャード・エバンズは著名な人であった。主の使徒として全世界の末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に尊敬され、ソルトレーク市のテンプル・スクエアから放送される、タバナクル聖歌隊のコーラスに交じえた「スポークンワード」の創始者として数百万の人々に愛し尊敬され、そしてその名はロータリークラブの会長として百カ国以上に広く知れわたっている。

政府関係者や数多くの一般人も彼の死を悲しみ、残された家族に哀悼の意を表した。

しかし、貧しい生まれの彼がこのような生涯を送るとはだれが想像し得たであろうか。9人兄弟の末っ子として生まれた彼は、生後2カ月半で父を事故で失い、その人生と性格は、犠牲と勇氣と信仰に一致した家庭において、慈愛に満ちた母親の手により形成されていた。

リチャード・エバンズのためにこの世の成功に至る安易な道を備えてくれる者はなかった。彼はよく昔のことを

思い出しながら、働かず学校へ通ったことは1度もなかったことを話していた。花売り、新聞配達、ソーダ水売り、トラックの運転手、毛織物売り、広告屋、印刷屋、鉄道の測量員などを経験し、その後かけだしながらラジオ放送の仕事に入った。

末日聖徒の大学で学んだ後、ユタ大学へ進んだが、伝道の召しが来たために勉学を中断した。その後約3年間英国で伝道し、「ミレニアル・スター」の副編集長となり、後にヨーロッパ伝道部の書記となった。

伝道の後ソルトレーク市のKSL放送局に入り、同時にユタ大学に復学した。そして学士および修士の学位を得た。この期間ならびにそれ以降、彼は傑出したラジオアナウンサーとして、また役員として認められるようになった。

リチャード・L・エバンズの名が世界的に知れわたるようになったのは、1930年に彼が、現在では定評のあるタバナクル聖歌隊全国向け放送のプロデューサー兼アナウンサーの職務についた時であった。その番組のプロデューサーをしながら、死に至るまでの40年以上もの間、彼は毎日曜日の朝、時宜を得た、人を刺激し、心を奪い立たせる短い説教を自ら書き、語ったのである。その人の心を射る、また励みとなり動機づけとなる靈感あふれる言葉は、幾百万の家庭に達し、人々の生涯を動かした。末日聖徒イエス・キリスト教会の神学をよく知らない数多くの人々にとって、彼は唯一の教会であり、形式的に接する唯一の宗教であった。また彼の放送の時間に合わせて礼拝を行なった人は数え切れない。

宣教師の時代に認められた文才により彼は30才の時「インブルームメント・エラ」の編集長に召され、30年以上もの間立派な業績をおさめた。

教会幹部に召されたのは32才の時である。七十人最高評議員の召しは、彼に幅広い伝道の機会を与えた。そして1953年主によって使徒として召され、十二使徒

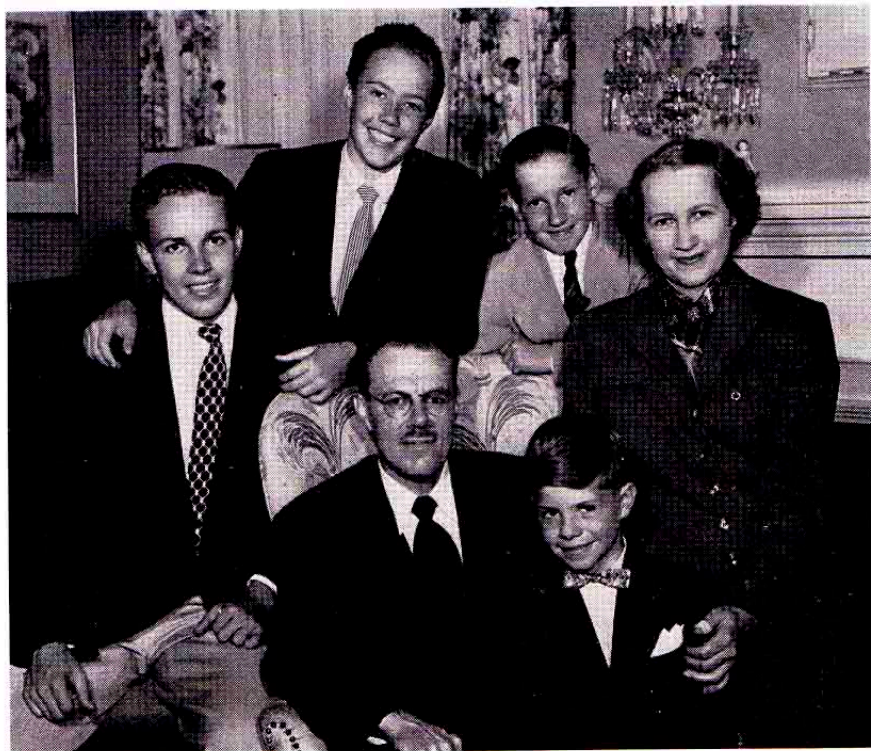
評議員会に名を連ねた。

彼は、教会の集会であろうが教会外の席であろうが、どこにあっても悔改めを説き、永遠の原則を教え、人生と神の徳、永遠の変わらざるものからの祝福を証した。彼は自分の利益を求めず、神に仕え、仲間を助け、時間と才能を主の業の発展のために、そして人間の徳の向上のために勤勉に用いたのである。

危機にある時、個人的な必要が生じた時、地位の高い者も貧しい者も、教会員も非教会員も、多くの人々がリチャード・L・エバンズの言葉を心に浮かべた。病いに倒れた時、彼の生涯で触れ合った人々が遠方から病院へつめかけ、家族を励ました。11月4日の葬儀には、彼が関係していた世界中の諸団体の代表が列席した。

テンプル・スクエアのタバナクルで開かれた葬儀で、彼の最愛の妻アリスと子供を伴った4人の息子たちが、彼の眠るひつぎから数フィート離れたところにすわった。あふれんばかりのタバナクルの壇上には、教会幹部に交じって彼の僚友が席を連ねた。真の賛美をこめたタバナクル聖歌隊の歌声が壁にこだまし、会場は愛と主のみたまにより満たされたのである。

リチャード・L・エバンズの名と生涯とその使命は決して忘れ去られることがない。「今日も、そしていつも」感動と感謝をもって思い出されることであろう。



写真説明

- 左、タバナクル聖歌隊と放送中のリチャード・L・エバンズ
右、リチャード・L・エバンズ、アリス・ソーンリー・エバンズと息子たち——(前)ウィリアム、(左から右へ)リチャード・L、リチャード・L・Jr、ジョン・ソーンリー・スティーブン
(1953年エバンズ長老が使徒に召された際撮影されたもの)

で ん ど う

と あ な た

暑い夏が過ぎ、みのりの秋たけなわの10月、次々と打出されるプログラムを通して、各地での兄弟、姉妹、宣教師達の活躍を耳にする今日この頃です。各地でのバザーの成功、毎月100名をこえる方々のバプテマス、また一つの著しい特徴は多くの家族の改宗でしょう。

また、10月21日木曜日から、日本伝道部の各支部・伝道地において、英会話がはじまりました。それに先立ち、種々の方法を使って広告がなされました。チラシや看板、ポスターを使ったり、またあるところでは新聞社の好意的な紹介もありました。また、英会話の後に多くの人々がMI

Aに出席できるように準備されたプログラムを通し、多くの方々が教会を訪れ、宣教師と共に学んでおられます。

兄弟、姉妹！

故、デビッド・O・マッケイ大管長の言われた、「会員1人1人が宣教師」の言葉を胸に、新しく訪れ来る多くの人々に、良き兄弟、姉妹として、迎え入れられるように私達の器を備えようではありませんか。また、まもなくやって来るすばらしいクリスマスの季節に愛する人々へこのメッセージを述べる準備も忘れずに。

モルモン教の使徒

「使徒」は、神の霊感により、神の御名を宣べ伝える者のことである。モルモン教の使徒は、神の御名を宣べ伝える者のことである。モルモン教の使徒は、神の御名を宣べ伝える者のことである。

米人の若者が来水

街頭で市民に布教活動

「米人の若者が来水」は、米人の若者が来水して、街頭で市民に布教活動を行っている。米人の若者は、米人の若者が来水して、街頭で市民に布教活動を行っている。

すべてを神にささげ

宗教、人間のあり方問う

「すべてを神にささげ」は、宗教、人間のあり方を問う。すべてを神にささげ、宗教、人間のあり方を問う。

婚礼家具

年ごとに高級品

「婚礼家具」は、年ごとに高級品。婚礼家具は、年ごとに高級品。

選択は必要性を

「選択は必要性を」は、選択は必要性を。選択は必要性を。

水戸伝道地にて
伝道中の宣教師達
(水戸新聞より)

熊 本 支 部

中 村 良 昭 兄 弟 の

証

ソルトレーク市にモルモンのすばらしい建物があるということを友人から聞いたのは、今から3年前になります。その頃は観光的兴趣として、私共の印象に残っていたこの建物がモルモンの神殿であると知ったのはつい最近のことです。モルモンと私共の結びつきは、本当の幸福を探し求めて心のさすらいの旅を続けていた私共が、ようやくこの旅の目的地を見出した時に始まります。

それまでのさすらいの旅をふりかえってみると、私の心の旅路は三つの時期に分たれていました。

第一の時期は一人旅の時期です。子供の頃から、私は毎朝神棚を拝むことを習慣づけられていました。成長するにつれて漠然とした対象である神を惰性的な習慣で拝むことに対して疑問を持つようになり、教会やお寺へ行って教えを聞きました。しかし、どの場合にも納得のゆく答は得られず、結局自分自身に答を求めるしかありませんでした。その頃、「神仏を尊び、神仏に頼らず」という宮本武蔵の教えを知りました。神仏を拝むのは自分自身の努力の足りない人のすることであると考えた武蔵流の生活が結婚するまで続きました。

注. 中村兄弟は国立熊本病院の第三外科医長を勤め、専門は心臓外科である。右の写真は10月13日熊本県下ではじめて心臓切開後、脈拍調節機を植えて心手術に成功した患者さんと中村兄弟（左）



第二の時期、熱心な仏教徒の家に育った家内から感謝の念を持つことと他力本願ということを教わっているうちに、今までの一人旅がおろかなものであったとわかり始めたのは、結婚後数年してからです。自分の力だけで今日に到ったと信じていた私にとって、感謝の念は必要ではなくまして他力を願う考えをあざけていました。しかし、医者として経験を積むにつれ、いかに勉強しても及ばぬ人間の非力さがわかるようになり、信仰の重要性がようやくわかりました。そんな気持ちで、仏の教えを聞き始めましたが、仏教の中で導く幸福とはどこにあり、どうすれば得られるのか、私共にはなかなかわかりませんでした。幸福を求める家内との二人旅はこのようにして始まったのです。

1971年4月のある日、モルモンの長老が二人たずねてこられました。この日から私の第三の時期、つまり家族との旅が始まります。モルモンの教えが無論、最初から理解できたわけではありません。しかし人間的にすばらしい長老達に接していると、モルモンの教えがいかにすばらしいものであるかということがわかってきました。自分達も長老達のような人間になり、神の国に入れるような人間になりたいと願うようになりました。それに家庭を中心にして、家庭の中に幸福があるというモルモンの教えは、家庭不在の日本にあって私の心を強くとらえました。モルモンのきびしい戒めも自分達が神に近づくためには、当然の努力であろうと考えています。教会で教わり、長老から教わり、聖典を読むにつけて末日聖徒イエス・キリスト教会が本当の神の教会であり、これこそ私共がさまよい求めていたものだということがわかり、7月11日親子三人で（7才の長男を除いて）バプテスマを受けました。

今のような社会状況にある時、本当に救われ、幸福を見出し得るのは私共の教会以外にはないと確信しています。

聖 徒 の 道

昭和42年12月18日第三種郵便物認可

1971年12月20日発行（毎月1回20日発行）第15巻第12号

